

324-120

Handwritten notes and scribbles in the top left corner, including the number '22007' and a signature.



釋宗演禪師

目次

一	修養を論じて明明徳に及ぶ	一
二	人心と道心との關係	元
三	道は須臾も離るべからず	元
四	性情と習慣との異同	元
五	至誠息むことなし	元
六	浩然の氣とは何ぞや	元
七	信念の確立	元
八	美としての女性	元
九	坐禪の用心	元
十	婦人と家庭	元
十一	感謝と報恩	元

明治
42 3 26
内空

一字不説

十二 宗教と教育……………二七

十三 入室の資格……………二九

十四 獅子吼……………一四

十五 健全なる思想の修養……………一四

十六 日本魂と西洋魂……………一六

十七 予が見たる花園國師……………一六

以 反

一字不説

釋 宗演禪師述

一 修養を論じて明明徳に及ぶ



今回當肥前鹿島佛教會の懇請によつて十日間御話をする事であるが、私はニヤフヤなることは誓つて申さぬつもりである。少くとも自己の経験したること、及實行しつゝある件に就て御話するに、堅く御約束をして置く。さて夏季講習といふとは、近頃は到る所に實行されて居る様であるが、是は頗る結構なものである。此暑中休暇を徒らに無意味に費すべきものではない。佛教では之を夏安居と稱して三千年前から意味ある修養を論じて明明徳に及ぶ

とに使つて居る。一體佛教は慈悲を以て主旨とするが、御承知の通り印度は熱帯國である故に、寒、雨、熱の三際中雨際になると毒蛇猛獸或は昆虫爬虫等多くて、郊外に出づれば、我れ此等の物の爲に害せらるゝともあれば、また我の爲に昆虫等が生を損せらるゝ場合多きを以て、雨時三ヶ月の安居中は、禁足護生をして、學問修行の爲め、大活動をなすべし時として使はれてをる。又西洋などの一部の様子を見ると、餘程獨立思想の發達してをることが、斯様な時でも分る。我國今日の青年の如く、いつ迄も親の脛を啣つて學問をする様な事なく、たとひ親が巨萬の財を積んで居るとても、決してそれを便とせず、自分の働で學問をするといふ考へで、學生の如きも中學以上になると、大抵一年中の學資は、夏季休業中種々の勞働によりて得たる財を以て充つることを勤むるのである。決して夏季休業は不生産的に遊び暮らすの意味ではなくて、學校外に働くといふ意味に使ふのである。我等も亦夏季休業期を徒らに遊んで

日を送ると云ふことをやめて、或意味あることに使ひたいのである。

次に本論に入る前に、聊か其準備として一言して置き度いのは、吾人は常に熱いとか寒いとか云つて居るが、熱い〜と叫んだから急に寒くなるのでもなければ、寒い〜言つたとて忽ち熱くなる譯の者でもないといふ事は知りながら、矢張其れを繰り返して居る。即ち其れは感情に使はれて動いて居るのである。然るに御互に其感情の發動するまゝに放任せば實に危険千萬である。故に其感情を或理想に移し向けて有用に働かしむることに方めねばならぬ。茲が即ち教育の力を待つ所以である。都て動物は心的反射作用、即ち感覺によりて動作するものである。若し之を植物に於て見れば、特地の動作として見るべきものはないけれども、少し高等植物に於ては、外界の刺激によりて、多少何等かの動作をなすのである。况や進んで動物界に入れば、都て外界の刺激によりて、感覺的作用を起して、種々の動作をするのである。高等動物の牛馬犬猫等の

如き。一見皆自動的動作を營むが如きも、大部分の働は皆他動的動作である。決して有爲的に一種の鞏固な目的を望んで、動作するものではない。尙進んで人類に就いて見るに他の動物と稍其撰を異にしてをる。尤も小兒の時代は未だ自意識を顯さず、他の刺撃によりて動作して居る。其花なると火なるとの辨別なく、たゞ手に之を執らうとする。然し漸く成長して、内外の教育によつて身心發達の後は、自ら正非曲直を辨じ、其執るべきものと、執るべからざる者と、又執れば其結果如何等の辨別を起すに至る。且つ其學術教育に由て鍛へられたる人は、愈々益々有意的目的に向つて活潑々地なる動作をなすのであるが、眞の智徳教育なき者は多く、感情の發動するまゝに行ひ、換言すれば感情に使役せらるゝを以て、往々道徳上、法律上の罪科を犯すのである。古へ禪宗の祖師は、「汝等諸人は十二時中に使ひ得らる、我は十二時中を使ひ得るなり」と、云はれた。誠に至言と云ふべきである。實に教育の目的は、有意的意力を鍛

練するにある。然るに往々學校教育を受けた者が、忌はしき行爲、猥らな行狀を敢てして憚らぬ。夫は日々新聞の三面欄を見れば、思半に遇くるところが多い。此の如き現象が屢繰り返される様になつたのは、一つは生存競争の激甚になつた結果であらう。此生存競争といふ新説は、ダーウイン氏始めて唱へしが如きも、世の中の競争の事實は、其以前に已に現はれてゐたに相違ない。凡そ社會が發達すれば、益々其同類の者が増加し、昔日自己の領分であつたものも、今日は侵蝕せられ、又一方には昔は一事業をなすに、五十人の勞力を費し、事も、今は器械力應用の爲に、僅かに十人が五人の力にて足るといふ風で、茲に人材の剩餘を生じ、大學や其他専門學校を出たる者にして、成績優等の者は早速賣れ口があるが、少し如何はしき者は、賣れ場が容易に見附からぬので、東京あたりの下宿屋の二階には、そんなのがゴロ／＼して居る様である。生活の爲に學問し、衣食の爲に勉強するに非ざれば、敢て之を以て答むべき

ではないが、動もすると、此等の種類が、煩悶に陥り、悪戦奮闘遂に得
堪へずして、つまらない行爲をなし、或はあたら生命を自ら奪ふのであ
る。斯の如きは獨り學生のみに限らぬ、教育家にも這裡に伸吟して居る
者もあれば、實業家にもある。洋の東西を問はず、職業の何たるに論な
く、一般に斯の如き悲風慘雨が吹き荒んで居る、實に哀むべく又憂ふべ
き現象である。凡そ、宗教の領分と、學問、即ち科學の範圍とは、元來
異なつて居る。宇宙唯一真理を立場として論せば、無論二致あるべきで
ないけれど、今假りに宗教と科學との兩面に區別せば、其趣向、理致亦
随つて異ならざるを得ぬので、且らく當今の心理學の言詞を借りて言へ
ば、科學は智に屬する者であつて、宗教は情によつて、信仰を本として
成立するものである。其れで成點から眺むれば、宗教の起點は取りも直
さず、科學の終點に在りと言つてもよろしい。彼の「巖頭の感」を遺し、宇
宙は不可解なりとて藤村操が華嚴の瀛壺に投身したのは、宗教と科學を

己れの有限の智を以て無限の宇宙を解せんとして、終に其及ばざるを知
り、以て到底不可解なりと速断せるに因るのである。獨り藤村生のみで
はなく、今日の科學者概ね然りである。小きは顯微鏡的物體より遠きは
望遠鏡的物體までの間がその研究範圍である、其範圍を宇宙無邊大に比
較せば、實に大海の一泡沫に過ぎない。若し顯微鏡を捨て望遠鏡を擲ち
て嗚呼宇宙は不可解なりと絶叫すとも、天地無限の當體に對しては、實
に蚊虻の一鳴號にだも價せぬのである。要するに科學研駁の終點、即ち
宇宙不可解の處が、やがて宗教の起點である發足點である。是の如く發
足と到着、到着と發足、是が真理の始と終と循環端ない處である。是に
於て願ふに、宗教と科學とは、其主宰する所の異ると共に、其一を缺か
ば宇宙眞の解釋は不可能である、隨て宗教家と教育家とは常に相提携せ
ねばならぬ。宗教家にして科學の領分を無視するは、眞の宗教家では無
い。又教育家であつて宗教の存在を認めざる者は是れ亦眞の教育家では

なからう。誠に宗教家と教育家とは、鳥の兩翼である。車の雙輪である。話が餘程枝末へ流れましたから本に還つて私が今日御話する方針は、御承知の通り佛典は實に浩瀚であつて、其要領を捕捉すること容易の業ではない。又佛典は多く吳音を以て讀む習慣であるから、餘程諸君の耳には入り兼ねるのである。故に私は諸君の最も耳馴れて居られる儒教の經語によりて佛敎の教意を擧揚仕様と思ふ。此方法は敢て私の新發明ではない。昔支那宋朝あたりの高僧が、佛敎を開示する爲に此種の方法を採られて、まことに快刀亂麻を斷つたの概あつたのである。近くは私の師匠なる今北洪川和尚も此方法によつて成功されたので、私も此方法は頗る有利なることゝ信じて居るので、矢張此方法を襲ふて講演を試みる考へである。故に今日は先づ「大學」の

大學之道在明明德在親民在止至善知止能定定而後能靜靜而後能安安而後能慮慮而後能得

と云ふ一章によつて御話をなすのであるが、少し體を損して居るから素讀のみにして置く。御承知の通り此章は「大學」冒頭の一章で朱子や陽明や其他諸家の註釋區々であるが、私は此れ等諸家の註によらず、自分己の見解によるのである。さて、大學の意味をやゝもすると學校の意味に考ふる者もあるが、ここではそうでなく、大人とか紳士とかの學問と云ふ程の意味である。尤も朱子の説も亦此意であつたかと思ふ。つまり智も徳も、二つながら完全に發達したる人を意味したのである。其の大學の道は明德を明かにするに在り、民を親マカたにすることにあり、至善に止まるにあり、之を古來「大學」の三綱領と云ひ來つて居る。其次に知止より而後能得に至る、之を五術と稱し、其以下治國平天下に至る、之を八條目と云つてある。此文章の構造は、三綱領を實際に現はすには、五術の法を要し、五術を完全に實行し得て、始めて此三綱領を圓滿に顯はすことを得るのである。文法の上では、國文法になつて居る。抑も此の國文

の法は、敢て人爲的に組織されたのでなく、元と天地自然の道理、例へば四季の循環、晝夜の交代、終はつては始まり、始まつては復た終り、恰も線の兩端を接合すれば其形圓かにして本未なきが如く、今此文法も即ち、知止而後能定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮而後能明、明而後能徳、民を親たにするを得、至善に止まるを得と、假りに文章を直して、此終りの得が始めの三綱領の頭に一々歸り來て始て所謂國文の法になつて居る。今は説明の便宜に因り、此の止、定、靜、安、慮、の五術より先にしやうと思ふ。此の五術は大切なることで、實に三綱領を實現せしむべき修養方法である。一體修養の側より見れば、彼の諸曲でも、茶道でも、插花でも、柔術でも、擊劍でも、乃至端歌淨瑠璃の如きも、皆精神修養の資料たるものと云ふべきである。諸曲や、茶道や、たゞ其諸ふことの音曲、また動作の末技は、ともあれ、其精神は實に一つの修養法である。私は茶道の心得はないが、其精神は和敬清。

寂の四にあると聽いて居る。其精神を常に體して居れば、茶道は學ばずとも自然と動作の上に表はれてくるのである。又柔道の如き、同じく精神修養を土臺とするので、彼の投げたり、抑へたりするのは未技である。堅實なる精神なきの柔道は、實に一種の龜野なる遊戲に過ぎないのである。劍道亦然りて、私の知人に、香川輝氏とて、近頃まで本縣の知事を勤めて居られたが、此人素と洪川和尚の門下生であつて、雲水の時から知り合つて居る間柄であつたが、六七年前本縣巡錫の時一日同氏の宅に請せられた。其時丁度妻君を失なはれた當座で暇さへあれば、學生などを相手に、劍術をやつて居られて、自分は是で坐禪して居るのですと云つて居られた。成る程夫れに違ひない。故山岡鐵舟居士なども、其れであつた。同氏の話しに、劍道は第一姿勢、次に交鋒次に變化次に無心と次第に鍛ひ行くので、若し姿勢正しからざれば心の統一を失ふ、心已に統一せざれば、敵と對して敗を取るのである。故に姿勢を正しく以て

心を統一し、而して後ち鋒を交へ、忽にして陽、忽ちにして陰、或は合し或は分れ、變化豈妙、這裡我あらず、又敵なきの無心の境に達するのであると云ふ。無心とは孔子の「心を欲する所に従へども則を踏へず」と謂はれたのも、實にこの境界を意味したのである。又東坡の時に、「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何舉似人」と無心を以て萬境に接すれば、溪水の晝夜潺湲たるも佛の活說法にして常に真理を語つて居る。山色の濃淡髣髴たるも、實に是れ佛の清淨身であつて、實相無相を現はしてをる。昨夜茲處に宿してより、親しく見聞せし此の溪聲山色は、是れ取りも直さず、吾佛八萬四千の教理である。此邊の消息は人々大悟の領分にして、到底他に語るべきものではないのである。との意味である。扱て前に返りてこゝに實行法として『大學』の五術は、實に佛教の禪定法に相當するのである。禪定は即ち靜慮であるが、此の五術も約言せば即ち靜慮である、即ち禪といつてよろしい。禪と云ふのは

獨り禪宗の禪のみに限らず、廣義に云へば、淨土門の南無阿彌陀佛の念佛も、日蓮宗の南無妙法蓮華經の題目も、眞言の陀羅尼も、共に是れ基處は禪であるが、就中禪宗は此禪の意を専門的に標榜する宗旨である。特に達磨禪は只打坐するのみを以て禪と稱するのでなく、眞個三昧に打坐せば行亦禪、坐亦禪、語默動靜體安然である。「禪源諸詮」と云ふ書物の中には禪宗悟道の種類を、外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、最上禪或は如來項上禪などと別けてある。或る學者は座禪を指して大早計にも、一種のメスマリズム即ち催眠状態に在る有様だと云つて居るが、是れは抑も大間違である。夫れ催眠状態は、都て心識の發動を制止したる時の状態を云ふのであるが、禪は決してそんなものではない。是れは未だ禪の何物たるを解せざる學者の言である。

此坐禪法は古今を貫き東西を通して不易の法である。近頃ハーバート大學や、コーペンハーゲンの大學などには默考法と謂つて、今の坐禪法

に似たることを、毎日一定の時間内に學生に課せられてあるが、其教授連の話を聴くに、凡そ種々の感情の起るは、先づ外界の對境が肉體に刺激を與へ、其刺激によつて始めて感情が發動するのである。故に端然不動の姿勢を持って、意力を充進せしむるときは、決して卑劣なる感情は起るべきものでないと、是れ頗る我意を得たりと謂ふべきである。昔し支那禪宗の第六祖曹溪大師が法性寺へ到られた時、門下生甲乙二人あつて、門頭の幡ばんに就て、甲は幡動くと説き、乙は風動くと論じ、互に執りて相譲らず、六祖言下に之を道破して、「是幡動くに非ず、是風動くに非ず、仁者心動く」と言はれた。宜なる哉言や、幡動くとするも心の動くなり、風動くといふも心の動くのであるが、是等は別に入室して商量を要する。専門のとはおき、例へば今鐘がなる即ちゴーンと鳴る鐘は、鐘が鳴るか撞木が鳴るか、畢竟是れ鐘鳴るにあらず、撞木鳴るにあらず、吾耳吾吾心是鳴るのである。是に於てか、吾心をして中正に在らしめは、萬物皆

中正、若し邪曲に在らしめば萬法咸く邪曲なることを知るのである。故に今日も私が講演の前に、諸君に數分間時、端然不動の姿勢にて默考するを奨めたのも、亦この微意である。要するに、止定靜安慮の五術は、明德を明かにし、民を親にし、至善に止まらしむるの實行方法である。次に三綱領に反つて説明せば、此親民の親に就て、或者は親は新の誤寫とするが、古へ親とは互用せられてあつたので、今は新の意にして明德を明かにするの明の字に通じてをる、即ち汚れなき意に見るのである。凡そ此明德と云ふは大にして曰へば、宇宙の實在を意味し、小にして吾人各自の本心本性である。佛教外の宗教では、此の本性なるものは、神の授與し給ひしものであると談する様であるが、佛教は然うでない。「涅槃經」の中に「一切衆生悉具有如來智慧德相」と説いてあつて、獨り吾人のみにあらず、牛馬犬猫昆蟲其他草木瓦礫に至るまで、本來立派なる如來の智慧德相が備つて居るので、實に如來の智慧德相は、自己固有の物であ

る。我々人間の智情意の發達は、其の自己固有の光を發揮するにあるのである。此固有の光即ち是れ明德である。決して隣の寶を借りて來たのではない、釋尊が菩提樹下に於て大覺せられたのも、此明德を自覺せられたのである。是に由りて、獨り佛教は、自覺の上に成立せるもの、他の宗教は概ね天啓を立場として成立されたる宗教である。佛教で佛と云ふを、世間では大間違な考で迎へて居る。佛には幽冥の二字が何時も附纏ふて居るかの如く、また死の字と常に相伴つて居るの感を持たれて居る。實に迷惑千萬である。何かの書にも、佛字の注に弗人に双ふ即ち是人非人なりと、言語道斷である。抑も佛とは印度の原語で、實は佛陀と云ふべきである。今略して佛としたのであるが、之を支那に譯する時は、覺の義であつて、更に人格視する故に、之を覺者とするのである。今此覺の義に就いて、自覺、覺他、覺行圓滿と分つが、自覺は是れ自己本具の徳相は遠くに求むるに及ばず、近く自己本來成佛なりと覺知徹了し、更

に進んで他をして又覺了せしめ、茲に絶對圓滿の妙理に體達せし者、是れ即ち覺者である佛陀である。今明德を明かにするは、自覺に合ひ、民を親たにするは覺他に當り、至善に止まるは覺行圓滿に相應すると見れば、實に不思議にも釋尊の言と孔子の説と東西符節を合せたる様である。其の實行の方法に於ても、一は止定靜安慮の五術を用ひ、一は禪の一法によるのである。止定靜安慮と云ひ禪と云ふも共に相等しきものである。扱て事は言ふに易く行ふに難し、吾人は常に實行を忽にすべからざることである。今一例を舉げて、其實行修養に資せんと思ふ。

『列子』の「湯問篇」かに出て居ると覺へて居るが、昔し唐土に飛と云ふ射術の達人が居られた、時に紀昌と云ふ者が飛術に就いて射を學ばうと思つて教を乞ふたら、「飛術示して曰く、先づ不瞬を學べ」と、不瞬とは物を見て瞬せざることなり、乃ち家に歸り、婦か機を織るの下に仰臥して、梭の左右するを凝視す、是の如く一年有半にして遂に不瞬を得たり、乃

ち師に告ぐ、師曰く、「善し次に視を學べ」と、視とは視力を強健にするを謂ふ、仍て又家に還り虱を毛髮にて縛し之を惣前に懸けて常に之を視る、視ること數月にして揚葉の大きさの如く、三年にして遂に車輪大の如し、乃ち弓を執つて虱を射るに其心を貫くことを得たりと、實に精神一到すれば何事か成らざらんで、修練實行の功は理論以上である。今五術によつて三綱の光を發揮するに、決して難事ではないのである。

二 人心と道心との關係

今日は『書經』天禹謨の一章に就いて、お話をしたいと思ふのである。即ち其文に曰く、

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中

と。而して本問題に入るに前つて、佛教の通説では、心に就いて如何に解釋してをるかを、一往説明して置くが、便利であらうと思ふ。今村

上博士の撰ばれた名目に依つて、佛教で分類する所の心を示せば、左の四類に過ぎない。

- (一) 起滅常識心
- (二) 相對恒續心
- (三) 絕對恒存心
- (四) 萬有總該心

先づ初の起滅常識心に就いて言はゞ、常識心とは即ち前五識であつて、今は識も心も同意味である。前五識とは普通に之を五官の心と稱して居る。此心は先づ外境に對して感覺を起すので、元八識と分つ時に、前の眼耳鼻舌身の五識が同類であるから後の三識に區別し、此五識を總括して前五識と云ふのである。此前五識が時あつて起り時あつて滅するので、耳は音聲を聞き、目は美醜を認め、鼻は嗅ぎ、舌は嘗め、身は觸れて寒暖輕重飢渴硬軟等を識るのである而して其滅するときは一例は熟睡などの時である熟睡には五官一時其働を中止してをる。斯く前五識は時から時まで起滅するを以て、之を起滅常識心と云ふのである。次に相對恒續

心とは一名之を阿頼耶識といふ、阿頼耶とは含藏の義である。其阿頼耶識なるものが大は宇宙より小は一微塵に至る、千態萬狀の現象を自體に含藏して前五識の如く時々起滅することなく、恒に相續すること、恰も滔々として流るゝ水の如く、前滅後生因果相連りて而も相續維持するところの心で、その相對といふは、後の絕對に對して謂ふたのである。次に絕對恒存心とは、一名之を庵摩羅識と稱し、又之を意譯して清淨無垢の心とも云ふ。凡そ現象の存する所は即ち實體の存する所で、實體には起滅なく、變化なく、之を空間の上より言へば周遍せざるなく、時間の上より論ずれば存在せざるなきものである。斯の如きを名づけて、即ち絕對恒存心である。又次に萬有總該心とは、前の恒存心と其體別ならずして、たゞ時間空間の上にて名を異にせしのみである。即ち恒存心の時は實體なるものが、時間的に過去際より未來際まで無始無終に存在する邊を言ひ、今の總該心は空間的に大は天地小は微塵に至るまで、唯一

實體の周遍せるに名けたものである。

斯く論じ來れば、宇宙の萬象悉く實體である。即吾人の眼に映する色、耳に聞く聲、舌に嘗むる味、身に感ずる觸、悉く是れ實體である。絕對恒存の心である又萬有總該の心に外ならざるのである。今は昔し彼のブルノーが當時唯一神教の教權を提げて全盛を極めし羅馬法王の治下に於て、特り萬有神教を唱へ、其身は終に法王の忌諱に觸れて火刑に處せられたけれども、其後に至つて、世人は此萬有神教の合理なるを認められたのである。抑もブルノーが萬有神教を唱へたる動機は實に下の如きことに有つたのである。氏若かりし時シカダ山に遊覽を試みた、同山は遠きより之を望めば如何にも無風流で何等の景致なしと思つたのに、豈に圖らん、其山中に到れば、溪水の清澄たるあり、樹木の鬱蒼たるあり、鳴禽の妙なる岩石の奇なる、其秀麗の意外なるに驚き且つ其神秘の潜めるを感じたのである。而して此山に立て反對のベスピラス山を望めば亦彼山

の外見の如くなりしが他日山に入りて其内容の更に明細なるものあるに一驚を喫したのである。此等の實驗よりして、彼は終に萬有神教を絶叫した。彼れ常に曰ふてをる、「物は如何に微小なりと雖も、神の性を宿さぬ程微小なるものはあらず」と、換言せば萬物皆な神の光明を發揮して居ると云ふのである。然り實に一切萬有を悉く其如の實體にして、實體を外にして萬有は無いのである。繰返して曰へば、萬象は即ち所謂絶對恒存心であつて、又萬有總該心である。吾人が自己固有の心と云ふものは、實は是宇宙に周遍せる無限の恒存心である、喻へば風は空間に満てり扇子を舉げて之を塵けば即ち扇子の風である。扇子の風が即ち空間充滿の風である、彼の天台の一念三千觀、華嚴の法界觀など大に研究すべきである。斯の如く佛教は心を本として開示悟入せしむるのである。是れで本文に入つて御話致しませう。

此執中の一章は、諸君も御承知であらうが、昔し堯帝が天下を舜帝に傳へ給ふ時、治國平天下の大方針として授け給ひし言であつて、誠に意味深長である。此中前の人心惟危、道心惟微、惟精惟一の三句が堯より舜に傳へられた聖語で、後の允執其中の一句が舜より禹に授くる時追加せられた教訓である。この本文中の人心道心を朱子は全く別なるものとし、王陽明や陸象山などは皆之を一なるものとして居る。即ち朱子注云、有^レ人心道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之正、而所以爲知覺者不同、是以或危殆而不安、或微妙而難見耳、精則察夫二者之間而不雜也、一則守其本心之正而不離也、從事斯無間斷必使道心當爲一心之主而人心每聽命焉則危者安、微者著、而動靜云爲、自無過不及之差矣、斯く朱子は人心道心を全く別物として居る、次に陸象山の説を伺へば、解者多指人心爲人欲、道心爲天理、此說非是身一也、人安有二心、自人而言則曰惟危自道而言則曰惟微、罔念作狂、克念作聖、非危乎、無聲無臭、非微乎、と、又王陽明の曰く、王道息、舊術行、功利之徒、外假天理近似以、

濟其私而以欺於人、曰、天理固如是、不知既無其心而尙何、所謂天理者乎、自是而後折心與理、而爲二、而精一之學亡、世儒之支離、外繫於刑名器數之末以求明其所謂物理者而不知吾心即理、初無假於外也、と、以上の説によつて見れば、王陽明も陸象山も、共に人心と道心とは二にして二ならず、畢竟是れ同一なりとの見解であつて、全く吾が佛教の説く所と同一である。

今此にいふ人心は佛教では煩惱心として居る。即ち外境に接して起る所の感情、所謂喜怒哀樂愛惡欲等である。道心は即ち菩提心のことで前に御話した明德である。この菩提心はもと煩惱心と不二にして、煩惱心を外にして別に菩提心が存するのではない。煩惱心を轉じたる所其まゝ菩提心である。此意味を通俗的に道破したる古人の句がある。「田の草をとりてそのまゝこやしかな」。田の草が生へて居つては惡むべき邪魔物である。初め稲苗を害せし草が一轉忽ち其れを益する肥料となる、人心の

轉したる處即ち是れ道心である。古聖曰く、衆生現行の無明直に是れ如來根本の大智なりと。更に水波の譬を引かうか、波に千浪萬波の差別あるも、一として其本體は水ならざるはないのである。水を離れて波なく、波を外にして水を求むべからず、水即ち波、波即ち水である。今人心は複雑にして差別ある波の如く、道心は平等にして一味の水の如く、道心の外に人心なく、人心を別にして道心はない、道心即人心、人心即道心である。凡そ宇宙には三大原則なるものがあつて、豎には時間的に、横には空間的に貫通して居る。即ち、一面に獨立し他面に一致し、而して此の二つが常に調和して居る。吾人の身體に就いて見れば、頭は頭に、手は手に、足は足に、個々獨立にして各々其働を縦ひまゝにし、手が自己の職分を忘れて、頭の責任を犯すなく、足が己れの任務を怠りて手の仕事を議するが如き事もなく、個々獨立して居ながら、一箇の身體としては四支五官、共に一致を守つて居る。斯く一方に各々獨立し、他方に

一致して、常に一定の目的に向つて進んで居る。是れ即ち調和である。此三則は個々別々なるにあらず、獨立を守る所が、即ち一致にして、又調和の在る所である。天台宗にては空、假、中の三觀を以て、宇宙を解決してをるが、その空觀は今吾人が見る山水花鳥風月一切の事物は、是れ吾人妄情の上に認識する所にして、妄情を拂へば畢竟真空なりとするをいふ。假觀とは、本來吾人妄情の上に認むるが如き萬象なしと雖も、萬象は因縁によりて無始以來生住異滅し、井然として無終に相續する所、是れ即ち假觀である。中道觀とは空を離れて別に假なく、假を外にして他に空在るにあらず、空即ち假、假即ち空、實に差別の萬象其まゝが中道の姿である。古人の句に、「有ると見てなきは常なり水の月」と、實に這裡の消息を道破せしものである。又或は、「無しと見て有るは常なり水の月」と假りに作つたとすれば、其反面の意味を現はすのである。又華嚴宗に於て宇宙を解釋するに、四法界を建立してをる、一に理法界、二に事法

界、三に理事無碍法界、四に事事無碍法界である。理法界は實體界を指し、事法界は現象界を云ひ、理事無碍法界は現象と實體と不二にして現象即實體、實體即現象なりと認むる所を指して名け、尙ほ進んで、事々無碍法界は、現象と現象と相碍へず、互に相即融通して、芥子の一粒是萬象の全體凡夫の一念、直に如來の大光明となるを云ふのである。尙ほ水波の譬によりて辨せば、水を認めて理法界とし、波を指して事法界とし、波即水、水即波なる所を理事無碍法界と云ひ、波と波と融通し波即ち波と云ふ所を事々無碍法界と云ふのである。斯の如く現實差別の現象、絶待即ち平等の實體であつて、現象と實體とは、二にして不二である。昔し釋尊說法の會坐に帝釋天現はれて、一莖の金波羅華を捧ぐ、釋尊之を受けて、たゞ默然として衆の面前に差し示し給ふ。此裡即ち無言の說法にして、一莖の華よく宇宙の現象と實體との不二の道理を示して居る。其の言を用ひて、此華美なりと云ひ或は此華妙なりと云はゞ、是れ相對

現象の中に落つ。今默然たる所、此現象の花即ち絶待の實體であると、其消息を無言の裡に説示し給ひし所である。今人心と道心とは、實に此意に外ならず。人心は道心の外に在ることなく、道心は人心とを離れてあるのではない。此の不二即ち本則の所謂中である。堯帝は之を以て之を舜に傳へ、舜帝は之を以て禹に傳へられたので、寔に眞理は何所までも一なるものである。

三 道は須臾も離るべからず

今日のお話は、『中庸』の一章に依つて、道は須臾も離るべからざること
を陳べやうと思ふ。即ち其の文は左の如くである。

道也者不可須臾離也。可離不道是故君子戒慎乎其所不視、恐懼乎其所不聞、莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。

凡そ學問は實行が伴はざれば何の詮もなきものである。本文は實に孔

門の實行法を訓示してある。勿論宗教特に佛教は信仰を土臺として居る、即ち智識を超絶して、設立されてあるにも關はらず、動もすれば高尚幽遠なる哲理を説くのは、理に於て太だ矛盾して居るのではあるまいか。然り信仰は智識を要せぬ、然れども、願ふに、信仰は動もすれば迷信の陥穽に墮在するの恐あるを以て、一方に哲理を説きて、以て準繩を示したのである。迷信と正信との區別は學理に於て合不合を以て判つべきである。今佛教の範圍を總括すれば、戒定慧であるが、其の戒なるものは即ち實行法を説き明したのである。而して此戒は、信者の階級によりて、各々別である。即ち比丘と比丘尼と、優婆塞と優婆夷とて此四衆に課する戒は各別になつて居つて、五戒、十戒、四十八輕戒、或は二百五十戒などと、實に澤山になつて居るが、其戒法の根本精神として、諸佛通誠の偈と云ふがある。即ち、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教、この四句の偈文を基礎として、所有戒法は建設されてあるのである。

道は須臾も離るべからず

る。諸惡莫作とは讀で字の如しであるが、之れは消極的に一切の惡事をなす事勿れと否定し兼善奉行とは積極的に進で一切の善行を修すべしと勸め、よし一善微なりと雖も、怠らず勵むべく、一行小なりと雖も撓まず修すべし、一往戒法は消極的の意味のみを表はして居る様に見へるが其消極の裏面には、必ず積極の意が存するのである。之を五戒に就いて其一二を示せば、先づ、殺生戒は生物の命を奪ふこと勿れと戒め、偷盜戒は己れの物にあらざるものを取る勿れと戒む、此等の勿れ勿れと消極的に戒むる裏に、自ら進んで他の生命を保護し、長養すべし、と云ふ意がある。又た他の物を盗まざるのみにあらず、進んで他の財を保護し増殖するに力むべきの意を存して居る。斯く消極積極兩面に涉りて勸誡してあるのである。扱て茲に一步進んで、謂ゆる善とは如何、惡とは如何と云ふことになる、古往今來、誰人も多くは五里霧中である。同じく善と云ひ、惡と云ふも、時の古今により國の東西に随つて各々異なるの

である。我れ善なりとするも、彼には不善なりとする事あり、昔は惡と認められし事も、今は善なりとする事あり、今日善とする事も、將來永く其の善たるの資格を持つや否や實に容易に決せられぬのである。極めて卑近な例が西洋で握手、接吻、抱合等を以て禮とされてあるが、我國にて矢鏢に之を真似たなら大變な間違が起る。西藏では最敬禮の時に左右の腕を高く頭上に突き立て舌を出して客に對するが、若し我國にて之を行はゞ、人を馬鹿にせりとして、大に他に怒られるであらう。斯の如き例證枚擧に遑なからう。縦令善なりと云ひ惡なりと云ふ、其標準を定むるに至ると、實に困難である。併しながら、佛教にては、其標準を立つるに、且らく俗諦と眞諦とに分つてをる。俗諦の上にては、國家の國法に遊ぶを善とし、之に反するを惡とするのである。眞諦即ち宗教の領分よりは、慚愧の有無を以て標準とするのである。即ち本心に於て、一點差つるなきを以て善とし、之に反せるを惡と定む。是れ實に古今

を通して變せず、中外に亘りて異なることなき、眞の標準であらうと思ふ。何となれば、本心なるものは人によりて異なるものではない、又時によりて變すべきものではないからである。此の本心已に私欲なければ利己と利他との隔なく、而も之を標準として、實行すれば、其行ふ所自利を離れずして、其まゝ利他を全ふする。是れ即ち絶待無我心である。換言せば、之を大慈悲心と云ふのである。佛教既に絶待無我を以て、道德の基本とするから、父母に孝なる處、即ち佛に孝、君に忠なる所、やがて佛に忠なる所以である、彼の基督教の如きは、然うでない。ゴッドの前には君臣の分なく、父子の別なく、たゞゴッドに忠實なるにあらざれば、人間道德の善は取るに足すとするのである。今斯の絶待無我なる處、是れ自淨其意である。次に是諸佛教とは、この絶待無我の精神を發揮する所、是れが即ち佛教であると、確乎として保證をしたる言葉である。この四句の偈に就いて一つの話を思ひ出したが、昔し白樂天とて御

承知の大詩人があつた。或時山中に入つて、彼の有名なる鳥窠を訪ふた。時に和尚は大樹の枝の上に、鳥の巢を作りたる如く、端然として坐禪をして居られた。樂天、之を見て曰く、「和尚は實に危険な事をして居るではないか」と。和尚乃ち眼を開き、顧みて曰く、「予が危きを爲すより、汝の爲す所尙一層甚だしいのではないか、聽け郷は今妻子珍寶高位を抱き意氣揚々として、浮世にあこがれて居るが、一朝風の吹き廻しの悪くて、其れ等を奪はれたならば、忽ち餓死するのであらう、是れ予が樹上にあるより、尙卿の爲す所の方が、餘程危険である、所以であると。出合頭に喝破されたのである。樂天屈せず問ふて曰く、「如何なるか是れ佛教的の大意」と。師答へて曰く、「諸惡莫作衆善奉行」と。樂天冷笑して曰く、「三才の孩兒も能く之を言ふ」と。窠曰く、「三歳の孩兒も之を言ふと雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し」と。實に言ふは易き事ながら、實行は太だ難く、八十の老翁も之を行ふ事は容易ならぬ事であると云ふ一言に、流

石の樂天も復我慢の角を播きて、大に佛教に歸依せられたと云ふ。今この『中庸』は孔門の實行法を示したるものであつて、就中此の慎獨篇は、れ『中庸』の曾子とも云ふべき、樞要なる一章である。抑孔子の弟子三是千人と註せらるゝが、其内に道を得る者七十二人、又更に道德に於て知識に於て孔子の片腕ともなるべきは、即ち顔回と曾子との二人に過ぎなかつたのである。然るに顔回は孔子の言葉にもある如く、「回や學を好む而して不幸短命にして夙に死せり」と、實に回は僅に三十餘歳にして死なれたのである。夫故に孔子の道を傳ふる者は、たゞ曾子一人であつたのみである。曾子は之を伯魚に、伯魚は之を曾參に、曾參はこれの子思に傳へた。此の『中庸』に即ち子思の述べられたので、孔門の實行法の精神を傳へられたのである。子思の人物は傳記の詳かなるのがないから、知るこゝとが出来ないが、『說苑』に説いてある事柄を以て、略は其全豹を窺ふ事を得るのである。子思が始め衛の國に居りし頃、頗る清貧であつて、襤褸

に表なく、二句にして九食とて、衣服も表なき裏のみのを着け、食事も二句の間、僅かに九遍しか食はなんだ、誠に清貧も清貧、實に赤洒々の素寒貧であつた。時に田子方と云ふ者があつて、之を聞いて狐の裘を贈つて曰く「吾れ人に借せは之を忘る、吾が之を贈るは捨つるが若し」と元來子思の人となり、容易に人の贈り物を受けざる人たる事を察し、殊更に個羊に言をなしたのである。果して子思は之を辭して受けず、田子方復た之を薦めて曰く、「我は有り氏は無し、之を辭する事なかれ」と。子思遂に斥けて曰く、猥りに與ふるは器物を溝壑に捨つるが如し、我貧なりと雖も、身を以て溝壑となすに忍びず」と、之に由りて子思の人格の清廉なるを知る事が出来る。「今道也者不可須臾離也、可離不道」と、實に吾人坐作進退常に體して離るべからざるもの、之を指して道と云ふので、若し離るべきは道と言ふべからずと。其の道は古今東西一貫したるものであつて、而も唯全一なるもの、假令儒者は之を取りて儒道と稱し佛者は

之を佛道と云ふも、是れ其本體は畢竟唯一の大道である。而るに儒は佛を譏り佛は儒を斥けるは、是れ已に感へるの甚だしきものである。實に道は偏なく黨なく王道蕩々たるものでなければならぬ。梁武帝の時に、雙林善慧大士一に博大士とも云ふ、有名な人が居られながら、常に頭に道教の冠を戴き、肩に佛者の袈裟を纏ひ、而して足に儒者の履を着けて居られたが、人あり其道冠を見て、道者かと問へば黙として肩上の袈裟を指し、佛者かと問へば儒履を指し、更に儒者かと問へば道冠を示す、頗る面白き作用である。是れ大道坦々として不偏たるを活現して居るではないか。其不偏なるを以て儒者は之を儒道とし道者は之を道教とし佛者は之を佛道として、少しも差支ないのである。即ち是れ同中に異あり異中に同ある處である。次に「君子戒慎乎其所不視、恐懼乎其所不聞」とは、凡そ道を體達せし君子は、人の視ぬ所、人の聞かぬ場所にも常に戒慎し恐懼するのである。道體には表裏なく隠顯なく、念々不離心である。

古語にも「君子對青天而懼、聞雷電而不驚、履乎地而恐、涉風波而不疑」とある。這個是れ道を體得せし者の行履である。「碧巖錄」の中に引てあるが、昔佛在世に、須菩提として解空第一の尊者があつた。解空とは能く空理を解了するを云ふので、尊者或時眞空三昧より出て、眼をパツチリ開かれた時に、誰か花を雨らして、尊者を讚歎する者があつた。尊者誰か之をなすと問ふ、空中に聲あり答へて曰く、「我は帝釋天なり、尊者今般若波羅密を説かれてある故に、隨喜に堪へざるを以て、讚歎供養するのである」と。尊者曰く、我れ般若に於て未だ曾て一字を説かず、這の什麼を讚歎するぞと、天曰く尊者無説我亦無聞、無聞無説是れ眞の般若なりとて、又々地を動かし花を雨して、大に尊者を讚歎したといふ。然り此の無説無聞と云ひ今視聞と云ふ實に是れ道の體なるものである。次に「莫見乎隱、莫顯乎微、是凡そ總ての物體上に就いて言へば、隱あり、顯あり、龜あり、細あり、大あり、小あり、であるけれども、その精神上、即ち道體の上

には、隠見微顯大小長短はない。是を以て微として顯かならざるなく、隱として見はならざるはないのである。後に「故君子慎其獨」此の獨か誠に大切なる所で、大道に體達せる君子は、行ひに表裏なく、隱微なく、龜細なく、自もなく、他もなく、人我以上の唯我獨尊にして即ち絶待無我の境界である。

四 性情と習慣との異同

孔子曰く、「性相近、習相遠」と。茲に性相近と云ひ、習相遠といふは、他の詞にて性相同じ、習相異ると云ふも同じことである。孔子の言は何つも悠揚迫らざる趣きがある。同じと云ふべきをも近いと云ひ、異ると云ふべきをも遠しと云はれた。抑も釋尊の御在世に、自己一派の説を立て、各々獨立し、互に相下らざる哲學者無慮九十六種もあつたが、佛教では之を外道と稱して居る。左れどあながち之を異端視するは非なりで

ある。但し内道に對して簡別した意であらう。其の九十六種と分れて居るのを大別して二とすれば、一は之を斷見外道とし、他は之を常見外道とすることが出来る。斷見は斷滅の見解と云ふ程の意味にして、今日能衆なる物理學者などが唱ふるが如きものである。即ち一切現象の活動は、都て物力によりて成立するものにして、物力一たび分解すれば、則ち無に歸するのであるとし、吾人の心の如きも物と物との結合の上の一種の作用であつて、總て物力に外ならぬ。丁度蠟燭に火を點じたるが如く、若し之を吹き消せば後には何物も留まらぬのである。又空氣袋の如きものにして、空氣の充滿して居る時は、膨脹して居るが、空氣を抜き去れば、其フクラミは忽ち無に歸するのである。要するに、物質以外には、何物をも認めないのであるが、是れは誤解の甚だしきものと云はねばならぬ。勿論燈火を吹き消せば燈火は滅せしが如きも、燈火の性を滅する事は出来ない、其性は宇宙に遍滿して居る。即ち再び其燈心に火を點す

れば、復た燃えるのであつて、たゞ形の上に於て消えて隠れて居るのと、燃えて顯はれて居るのとの差あるみであつて、決して火の性は何時まで断滅すべきものでない。つまり此断常の二見は靈魂問題の異見であるから、靈魂其物を定義した上でなければ、其常断二見の誤謬を知ることが出来ぬ。それは後に辨する積りである。扱て次に常見は常住にして變化なしと云ふ見解である。即ち靈魂なるものが何時も變化なく常に存在して、人には人の靈魂、馬には馬の靈魂、牛には牛の靈魂、犬には犬の靈魂、猫には猫の靈魂として、固定的に存在するものであるとの見解を持つて居るを常見と云ふのである。抑々靈魂とは如何なる物であらうか佛教以外の所謂外道の説では、吾人の肉體と精神との外に、一種不思議の働をなすもので、神と人との中間に在る一種の我、即ち俗に云ふ幽霊の如きものがあるとし、之を名づけて靈魂と云ふのであるが、佛教は右の如き身心の外に、奇々妙々なる靈魂が存在すと云ふが如きは、断々乎として

許さぬのである。故に斯の如く身心の外に存する怪物か、靈魂であるならば、佛教は全然無靈魂説を主張するのである。何となれば、靈魂が身心の外に介在することを許さぬからである。若し哲學で云ふ處の靈妙な作用をなす心を目指して、靈魂と云ふならば、佛教は固より之を認容してをる。此意味より云へば佛教は有靈魂論の本案である。蓋し此の靈魂は實に宗教に於ける千古の大問題である。空間の六道四生も、時間の過現未も、輪廻轉生の有無も、皆之によりて決するのである。無靈魂とする時は、輪廻轉生の説は立處に瓦解し、輪廻轉生説を立てんとせば靈魂は否定すべからず。此靈魂の有無論に就いては古來印度の馬鳴、龍樹等の碩學も、大に論議せられたのである。

加之ならず釋尊が出家入山して、最初アラ、カラン等の道士に就て研學し、而して皆な契はず、後ち去りて檀特山に入つて沈思工夫し給ひしは、全く此靈魂論に就いて彼れ道士等と意見を異にして居られたからで

ある。即ち道士は身心の外に靈魂ありとの意見を抱き、釋尊は全く之れ無しとし、此確執より終に憤然として去り、雪山六年の修行をなされたのである。而して正覺山前に愈々其目的通りに所謂靈魂として一種の怪物が身心の外にあるにあらず、畢竟無靈魂即ち大無我なりと御悟り遊ばされたのである、其後山を出で、一切衆生を御化導なされるにも、外道の主義と格別なることを表はさんが爲に、三法印なるものを旗印として、世に打て出られた。乃ち三法印なきものは佛教にあらずと簡別し給ふたのである。三法印とは諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三印である。諸行とは宇宙萬象を意味する語にして、其萬象は實に無常である。凡そ生あるものは必ず滅あり、形あるものは必ず變化あるものにして、恰も屏浸たる水の晝夜流れて止まらざるが如く、翻駭たる雲の絶えず去來するが如く、常に生滅變化して暫くも止まる事なし此道理を指して諸行無常と云ふ。次に諸法無我とは、諸法と云ひ諸行と云ふも畢竟同意味である。

但し少しく表裡の別があるまでで佛教では萬象を指して諸行と云ひ又諸法と云ふが、法は即ち法則にして、物の存する所には必ず法則があるからである。其諸法即ち萬象なるものは、元と因縁所生にて、別に我として存するものなし。凡そ我には一定の意義がある、所謂常一主宰とは、其意義である。然るに如何せん、萬象悉く此等の常一の性質なく、又主宰自在の力なし。要するに諸行無常は、萬象の時間的に變化するを云ひ、諸法無我は空間的に生滅止まざるを云ふのである。次に涅槃寂靜とは、其言葉は梵漢兼舉で、涅槃は印度語、寂靜は支那語であつて共に同意味のものであるが、云までもなく涅槃は佛法終局の樂地である。詳しく説明は之を他日に譲りてをくとして、兎も角も此の三法印の道理の存するものは佛教であると、佛が御定めになつたのである。彼の弘法大師の四十八文字の長歌は、此三法印を顯はせる諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の四句の意を示したものである。「いろはにほへどちりぬるを、

わがよたれぞつねならむ、うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみし
るひもせず」とは實に佛教の道理を説き盡して餘蘊なきものである。且
つ何人にも、よく了解することを得るので、文學として見ても、實に
立派なるものである。是れ即ち釋尊が根本より無靈魂を以て理想とせら
れたる所以である。

然らば輪廻轉生と無靈魂との融和は、如何にせば可いか。勿論、合理
的靈妙の作用をなす心の存在は、素より許容するも、其心が理由なく輪
廻轉生すと云つても、甚だ面白からざる道理である。然らば輪廻轉生は
何物が之をなすのであるか、其疑問に答ふるには惑業苦の三障を略説し
て見ねばならぬ。惑とは吾人の煩惱心を指して云ふので、之に二つ區別
がある。一は見惑と云ひ、二は修惑と云ふ。その見惑とは正しき心の上
に一點の曇りが掛つて、正しからざる見解を起すを云ひ、修惑又は思惑
とは見惑と同時に種々誤謬の感覺を心の上に起すのである。此見思の二

惑が交、根本となつて一切善惡の作業を起し、此作業が塵も積んで山をな
し、終に其の結果を來たして、茲に苦報即ち業報を受くるのである。斯
くの如く吾人の迷妄心が業を起し報を受けて轉生止まざるので、決して
身心の外なる一種の靈魂あつて、輪廻轉生を營むのではない。而して其
受報の有様を佛教にては、順現業、順次業、順後業、順不定業、と分つ
のである。順現業とは今業を作つて、今直に報を得るを云ひ、順次業と
は今の業が此次に報を招くを云ひ、順後業とは夫より次第に後へくと
回つて報を受くるを云ひ、順不定業とは受報の時は定まらざれども、必
す何時か報を受くるを云ふ。斯くの如く一たび業を起せばその報を受くる
上に、時間の差こそあれ、因果の道理として、必ず其業因に報ふて結果
を往來するとは、走馬燈の上の人畜の形の如きものであつて、其本性こ
そ、彼此互に相近く、相同しきも、其の習氣、業感の形狀は、箇々相違さ

かり、人々各異なつを。以上輪廻轉生の説は、獨り佛教のみではなくて、儒書の中にも、炳乎として存する。「尙書伊訓」に曰く、作善降之百祥、作不善降之百殃、と。「周易」に曰く、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、と。又「繫辭」下傳に曰く、明得失之報、同上傳に曰く、原始反終、故知死生之説、精氣爲物、遊魂爲變、是故知鬼神之情狀、と。「莊子」天瑞篇に曰く、死于此者則生于彼、萬物皆出於機、皆入於機、と。又唐の虞世南云く、以所修爲因、所報爲果、所修有一缺、果亦隨滅、是以聰明醜於形、慧於心、趙一高於才、下於位、羅褒、福而義、瓜惠、貧而有道、其不同也、如斯懸絶、興喪得失、咸必由之、下士庸夫、見比于之、割心以爲、忠直不必爲也、聞偃王亡國、以爲仁義不足、法也、若然、盜跖高枕於東陵、莊騶懸車於西蜀、老終其命、良足貴乎、若夫彭生爲豕、如意爲犬、黃母爲龜、宣武爲鼈、鄧芥爲牛、徐伯爲魚、羊佑之前身、李氏之子、豈非休咎報應之徵耶云々。虞世南は唐の太宗の文學上の顧問と云ふ程の碩儒である。又、宋の時湖州、

粹禪師一日乘官人と共に道場山に登り、壁間に三界輪廻の圖を掛くるを見る。乃ち官人之を指して問ふ何物ぞ。粹禪師答へて曰く、是れ三界輪廻の圖なり、獨り佛教のみの説にあらず、孔子も亦之を云ふ詳かなり、官人怪み之を問ふ。禪師曰く、「孔子曰、性相近、習相遠」と、衆大に感服して合掌せりと。又、彼の有名なる司馬溫公は、其の初め破佛家なりしも、友人の勧めによりて、後に佛教に歸し、輪廻轉生の説を信し、五言の詩を作られた。今世の未だ多く之を知らざる者の爲に、擧げて參考とする。

(其一) 忿怒如烈火、利欲如銳鋒、終朝常戚々、是名阿鼻獄、(其二) 顔回安陋巷、孟軻養浩然、富貴如浮雲、是名極樂國、(其三) 孝道通神明、忠信行登陞、積善來百祥、是名作因果、(其四) 言爲百世師、行爲天下法、久々不可掩、是名不壞身、(其五) 仁人之安宅、義人之正路、行之誠且久、是名光明藏、(其六) 道意修一身、功德被萬物、爲賢爲大聖、是名佛菩薩、と又、「傳燈錄」に唐の于頔會て紫玉禪師に問ふて曰く、如何なるか是れ黑風吹其船舫漂隋

羅刹鬼國」と、此文は「法華經」の文にして暴風吹荒れて其船を覆へし、羅刹鬼國に落つる時、如何との意なり、禪師答へて曰く、「咄此の客作漢意摩の事を問ふて什麼かせん」と、客作漢とは輕蔑罵詈の言にして此の渡り者めと云ふが如し、于頔此の勃卒の一言を聞て呆然色を失す、禪師是に於て徐ろに于頔を指して曰く「這箇即ち是れ漂溺羅刹鬼國と、于頔大に悟つて信受したといふ。要するに此等の多くの例を引き來るに、畢竟六道輪廻の主體なるものは、吾人の心識にして、別に身心の外なる靈魂あるにあらず、即ち佛教は靈魂を身心の外なるものと定義する時は無靈魂論であるが、之に反し合理的靈妙なる作用を有する心識を指して靈魂と云ふ時は、佛教は有靈魂説である。今孔子の性相近し、習相遠しは、要するに此意に外ならぬのである。

五 至誠息むことなし

『中庸』に曰く、「至誠無息」と。是は『中庸』の眼目とも言ふべき格言であつて、大は宇宙より小は一微塵に至るまで、一秒時も息む時なく活動してをる。四時の循環も、百物の生育も、皆この至誠その物である。之を求めて徒らに遠きを尋ぬるは、抑も迂なこと、吾人が擧手投足の近きに在るを知らずや。實に至誠は宇宙を貫きて至らざる處なく、達せざる時ないのである。世間の生物學者は、此の至誠活動して息む時なき有様を、生命即ちライフであると云ふてをる。其れも一理あることである。近世「ダーウイン」の進化説に就いて見るに、一切の生命を物質の側に認めて説をなしてをる。其物質は最初炭素とか、窒素とか、酸素とか、水素とか、の混和によりて、原形質と稱すべきものが成り立ち、其物は頗る柔軟にして、而かも弾力あり、且つ變化の力に富でをる。其形は恰も鶏卵の白味の如きものなりと云ふ。何處の歴史にもよく出逢ふ開闢説などに、世界の始は渾沌として鶏卵の如く、終に萬象を形成せりと書てあるが、頗

る面白い。今ダーウインの説も、原形質のある處には、必ず生命あり、生命のある處には、必ず微粒とも云ふべき物質あつて、二つの特質を備へてをる。即ち酸化と弾撥との二作用である。先づ此の酸化性が生命を續くべき原動力となつてをる。例へば吾人が呼吸をなすや、酸素を吸入して酸化作用を起し同時に炭酸瓦斯を放出するので、吾人は生命を持続してをるのである。次に弾撥性なるものは、外物の刺戟に反激するのである。此の酸化作用と反撥作用との二つの力ある爲に、生物界は常に活動してをるのである。更に彼の同化作用は一轉して、消化作用となる。此作用は外界の物を自己の體內へ取り入れて、自分と同化せしむる作用であつて、換言せば外界に於ける他人的物質を捉へて、自分の親類となす作用である。今日の高等生物が飲食するのは、即ち其作用の顯著なるもので、疲労を補ひ、身體を長大にするは、皆な是が爲である。然るに身體の發達も、或る程度に達すれば、其力は一轉して、分殖的作用、即

ち生殖の初になるべき作用を起す、抑々物質は或程度まで増大すれば、それ以上に發達するものではない。然れども先へ益々進まんとする生命の力あるを以て、茲に分殖的作用を生ずるのである。此作用は一が二となり、二が四となりて、常に二つ二つと分殖するのである。要するに、一の我が二の我となり、更に四となりて分殖するのである。分殖と生殖とは其意少しく異なつてゐて、生殖は親が子を生むのであるが、分殖は一の親は二の親となり、四の親と殖えるを云ふ。その分殖の著しく進んだる作用を生殖と云ふので、此作用によつて、生物は繁殖し、同類は益々増殖するのである。是實に至誠無息、活動しつゝあるの理、昭々としてそれ明かなりと云ふべきである。然るに同類の繁殖は茲に生存の競争(ストラグル、オブ、エキジスタンス)を始むるに至る。即ち餅屋は餅屋同志競争し、酒屋は酒屋同志競争し、小にしては人と人、大にしては國と國と、互に掠奪闘争を逞ふするに至るのである。競争に對しては、たゞ一に努

力せねばならぬ。努力せざるものは、遂に自滅するを免かれない。力勝たざるものは、自ら仆れねばならぬ。是に於て事實は曝露され、遂に弱肉強食の現象を呈するのである。道徳上、政治上よりは此現象を絶対に制せざるべからざるも、生物界の現象としては、實に當然の真理である。生存努力の次に起るは變易(バリエーション)である。凡そ自然の法として、物質は其組織の上に於て、常に變易すべきものである。是れ即ち物の種類の別、自ら生ずる所以である。其れより身體の各部が境遇に順應する様に、變化するを應化(アダプテーション)と云ふ。此變易と應化とを内外に區別せば、變易は吾人身體上に就いて云ひ、應化とは身體が對境即ち外界の萬象に順應し、外界の萬象吾人に順應する様になつて居る。例へば人間は最初尻ツ尾を持つて居つたのだが、今は其必用ないので、自然と取れてしまつた。内臓にても、盲腸などは、最初は有用であつたに相違ないが、今日では不必要になつて居る。男の乳房なども、そうである

そよな。都て吾人の身體が、對境に順じて相應するのである。次に遺傳(インヘリタンス)是れは今の身體の變易又は應化にて得たる特殊の性質が、子孫の固有の形質となるのである。其次は適種存生、(サバイバル、オブ、フィッテスト)一言せば境遇に適する者が、生存するの意にして、即ち時代境遇に適合して、生活に好都合なるものが、勢力を得て、益々繁盛に赴くと雖も、其れに適合せざるものは、遂に自滅するのである。以上之をダーウインの進化の五則と稱し、生物發達の歷程を説示したものである。然らば此五則は、人間知識の全部かと云ふに、決して然らず。如何に科學萬能の今日とは云へ、單純なる化學鍋の中からは、猫一匹でも生て飛び出す事は不可能である。實に生物は科學者の所謂生物の生命なるものの上に、生命を作る、生命とも云ふべき靈物が存在するのである。即ち宇宙實在の生命なるものあつて、それが何日生れたといふ音信もなく、何時死ぬると云ふ沙汰のなき不生不滅のものである。此生命の裡に四季

も循環し、晝夜も交代し、さては一切の萬象皆な大活動を續けてをるのが、所謂至誠息むなく、無始無終に流行して居るのである。故に吾人は至誠と共に終始せねばならぬ、今日或種の學者、又は紳士豪商と目せられて居る徒輩の中、往々にして其品性の陋劣なるあり、人格の卑謏なるあつて、此等人士の目前に少しく銅臭の餌を垂れなば、一竿に幾匹でも釣る事を得るのである。看よ堂々たる帝國軍人の中に賣國奴さへもあるではないか。實に吾人は其肉を喰つても、尙ほ足らぬのである。何んと淺間敷事ではないか。世人動もすれば云ふ、我文明は物質に於てこそ西洋文明に後れを取る事もあるが、精神の文明に於ては一步も譲らずと、意氣昂然鼻を高くする者あらうけれども、残念ながら或意味に於ては、精神文明の點に於ても、遠く彼れに及ばざる所多々あるのである。然るに是の至誠の二字を額頭に貼在して、勇往直前せば、富貴も淫する事能はず、貧賤も移すこと能はず、而して威武も屈する事能はざるのである。

彼の法然上人の如き、親鸞上人の如き日蓮上人の如き、此至誠と終始一致して流瀆も極刑も、見て以て紅爐一點の雪とせられた。吾が佛光祖師の如き、彼の元兵が無禮を加へんとするに當て、神色自若として、乾坤無地卓孤頂、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風、と道破せられた、是皆な至誠の血の迸る所である。此の至誠無息をダーウインは天則で以て説明したることは、前述の如くてあるが、吾が佛教にては、十二因縁を以て明示してをる。ダーウインは物質上に就いて説を立て、佛教は寧ろ心の方に重きを置いて其れを解釋するのである。左に少しく蛇足を添へて見やうか。

凡そ宇宙の萬象は其生物たると、無生物たるとに論なく、成な十二因縁によつて成立つて居る。今便宜上吾等人間を萬物の代表者として、其活動變化の有様を辨せば、第一、無明、是は過去に起す所の煩惱である。第二、行、是は過去の煩惱に諸業を行する時である。第三、識、是は過去の

業煩惱の因によりて今生の果報を受くる最初の心。即ち母の腹に宿る最初の心である。第四名色。是は父母の赤白の二滯和合して、母腹に宿れども、正しく眼耳鼻舌身意の六根未だ具足せず、只形の如く骨肉支節等ばかり出来てをる故に、名色と名くるのである。第五六入。是より六根已に具足するのである。然れども未だ苦樂の別を辨せぬのである。第六觸。是は生れてより二三歳までの時である。苦樂を分明には知らず、只荒く觸るれば泣く位の分別である。第七受。是は生れて五六歳より十四五歳に至る間で、已に苦樂を分別し、又漸く食欲の心を起す。併しまだ淫欲などの深き心はないのである。第八愛。是は十四五歳より以後財寶を愛し淫欲を行するのであるが只未だ強盛ならぬのである。第九取。是は年已に長大にして、淫欲最も深し、之に依て五欲の境を貪り、四方に馳求するのである。第十有。是は財色を東西に漁つて、身口意を経て種種の業を作るのである。是れ即ち當來に果報を得べき業因を作るのである。

第十一生。現在に作る煩惱業に因りて又未來にも生を受くべきこと治定して、現在の識の如く未來を有するのである。第十二老死。是は現在に名色、六入、觸、受の果報を得るが如く、未來も亦其通り受くるのである。斯く無限に輪轉する間に、或時は進化し、或時は退化することもある。是の如く或は進み、或は退き、變化極りなく、輪轉限りないのである。ダーウインの五則も佛教の十二因縁も一は物の上に於て説き、一は心の上に於て論ずる相違はあるも、其向上發展の意義に於ては、同一理である。吾人は此道理を明らめ、至誠と共に起き、至誠と共に寝ね、常に至誠と離れざれば、仰て天に愧ぢず、俯して地に慚ぢぬであらう。或人問ふて曰く『中庸』に所謂誠とは其體何物ぞ。答へて曰く、其體歴然として存すと雖も、之を體得する事は甚だ易からず。又問ふ、之を體得するに術ありや。曰くあり、曰く其術を示せ、曰く博く學び、審かに問ひ、慎んで思ひ、明かに辨んじ、篤く行ふ、是れ即ち至誠實行の法と云ふも

のである。

六 浩然の氣とは何ぞや

孟軻曰、我善養吾浩然氣、其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞乎天地間。

本章は孟子の性善説と並んで有名なる一章で、且又此浩然の氣に就いて諸家の説をなすもの、枚舉に遑なしであるが、孰れも一長一短を免れぬ。私の先師なる今北洪川和尚が儒を捨て、佛に歸入せられたるも、素と此浩然の氣に就いて大なる疑問ありしが爲であつた。孔子の道統に就いては、先日もざつと御話をして置いたが、尙詳細に言へば、子思が「中庸」を作りし時代に、諸子百家、雜然として起つて來た中に就いて、揚朱、墨攬、老聃、莊周、申不害、韓非子等各々其説を守つて相下らず、一方には、彼の秦は商君を用ゐて國富み兵強し、楚魏は吳起を用ゐて戰

勝ち、齊の威王宣王は孫子田忌の徒を用ゐて國勢を旺んにし、蘇秦は六國を従合して西の方、秦を攻るの策を立て、張儀は東西連衡して天下を安んせんと務む、世は實に攻奪を賢なりとし、實利を以て得たりとするの時、孟子は蓋天の英才を抱いて、魯の皞郷に生れ、業を子思の門人に受け、遂に孔子の道統を嗣ぎ、唐虞三代の徳を述べられたのである。而るに世は其説を迂遠にして、時に合はずとなし、其言を用ゐるものはなかつた。故に退て其門人と共に詩書をし序て以て孔子の意を述べ、「孟子」七篇を作り性善説を發揮し、浩然氣を提唱されたのである。此の性理の善惡などと云ふことに就いては、孔子の時は未だ判然たる説明はなかつたのであるが、孟子に至つて始めて性は善なりと判然たる旗幟を學界に樹てられたのである。然るに世は、益々戰爭熱に浮かされて、誰とて道統を傳ふべき適材がなかつたので、道統は、茲に立ち消えの有様となつたのである。其後、漢代に至つて、公孫弘、董仲舒、孔安國等の學者輩

出して、聖人の道を維持せられたのであるけれども、未だ孔子の道統を承たとは言はれぬのである。次に晋の時に至り陶淵明や元魯山等の大才出で、聖人の道に歸して居たけれども、是等は所謂隱者であつて、表面に旗幟を明かにして、世間を風靡せしむる底の人では、なかつたのである。下つて、唐朝にては随分聖人の道を奉ずるの徒もあつたが、概ね文章の方に全力を用ふる傾があつた。道を發揮する側ではなかつたのである。尙下つて、宋の代には、周惇頤別號を濂溪と云ひ、字は茂叔と云ふ碩學出で、孔孟の道の衰へたるを慨き、非常な精力を以つて學問をせられた人である。然るに其當時明眼の師がなかつたので、非常に苦心して居られたが、或時、黃龍慧南禪師に邂逅して、教外別傳の法を尋ねられた。禪師先づ口を開いて、反問して曰く、「孔子の曰く朝に道を聞て夕に死すとも可なりと、此道なるもの、畢竟何物ぞ」と。茂叔閉口して、答ふること能はず益々道に就いて、疑を深めた。去つて、金山の佛

印禪師に參じ問ふて曰く、「天命之謂性、率性之謂道」とあるが畢竟如何が是れ道とする」と。佛印答へて曰く「滿目の青山看るに一任す」と。周子は愈々不可解の穴に陥り呆然自失した處で、佛印は呵々大笑せられたが是處で茂叔は始て入處を得られた。後ち東林の總和尚の處で道の淵源を悟了し「易學心傳」と云ふ書を著はし、大極は無極なりと唱へ出された。是は眞に當時學問界の惰眠を破りたる一大警鐘とも云ふべき大卓見である。茂叔の門人の程頤、別號を明道と云ふ先生があつた。朱子學派では、大切なる人であつたが、此人は初めの頃は、佛教の小乗の道理を學んで、此小乗教を以て直ちに佛教の全豹だと思つて、大に辯難攻撃されたのであるが老年に及んで、頗る佛教の眞意義を悟り得たやうである。拈て明道より楊龜山、其より羅豫章、其より李延平、其より朱晦庵、即ち朱熹と學統を傳へて來た、中ん就く朱子其人は實に才氣横溢、何でも才に任せ、やつた人で、初め佛教を研究し、張拭、呂祖謙等と共に、經山大慈

禪師に參した人である。併しながら惜ひことには、朱子は、たゞ佛教の門戸を一瞥した位で、未だ其堂奥に至つて、居らなかつた。彼の排佛は其れがためである。然るに、其後、佛教の苦集滅道四諦及十二因縁等の道理の蘊奥をきくに及んで、前に佛法を破斥せしを悔ひて、其思想に大變化を來たしたのである。其後明朝に及んで王守仁(陽明)あり、彼れは獨り文事のみにあらず、武道に於ても達人であつた。彼れは明窓淨几の下に筆硯と親むと同時に、又野戰攻城の間に於て功を奏した人である。此の王陽明に五溺として任俠に溺れ、騎に溺れ、射に溺れ、老佛に溺れ、遂に孔門に歸したと云ふことがある。其言曰、守仁蚤歲舉業溺志詞章既乃稍知從事正學而苦於衆說紛擾茫無可入因求諸老釋欣然有會於心以爲聖人之學在此矣中略後謫官龍場居夷處困動心忍性之餘恍如有悟體驗探求再更寒暑證之六經四子沛然若決江河而放之海也云々。以上は支那に於ける儒佛大略の關係である。吾邦にては近世藤原惺窩、中江藤樹などは儒門の大

家にして、又佛法を會せし人である。爾後仁齋、東涯、徂徠など續々輩出したけれども、道學の心法は次第に竹篋下りになつた。

扱て先師洪川和尚は此浩然の氣に就いての一大疑團を解決せんとして、佛門に投せられたのである。洪川和尚は元と大坂の人であつて、最初藤澤南岳氏の父なる東涯の門に入りて、儒を學び、後ち淡窓、旭窓などと往來して、年二十四五の頃は、早く已に大坂に一私塾を開いて、門人を集めて、教鞭を執つて居られた。然るに或る日門弟を集めて、此の浩然の章を講せられる時、忽ち物あり胸に塞りたる如く、中心より、浩然の氣とは、抑も何物なるかとの疑問が起り、如何にしても、其の解釋が出來なしたのである。茲に始て佛門に投じて、此疑團を拂はんものと決心せられた。當時、恰も芳紀正に二十、才色二つながら優秀な妻女ありて、交情も、いと濃やかであつたとの事であるが、所謂會者常離、道の爲には断ち難き恩愛を断ちて出家せられた。其の時の離縁狀が餘程奇抜であ

る。(我と汝とたとへば、糸をもつて、土偶人をつなぐが如し、今糸切れて、吾れは山に入る穢土厭離仍て件の如し。)即ち三行半である。當時親戚諸氏は、切に此を思ひ止らしめんとせしも、遂に従はず留別の詩を賦して曰く、孔聖釋尊非別人、彼言見性此謂仁、脱塵体怪吾、龜放行個、浩然一片真と、其日直に出發して、京都相國寺僧堂の師家鬼大拙と云ふ惡辣なる和尚の室に投じて得度せられ、名を守拙と改められたのである。儒門に在ては、今北真三郎と云ふ立派な先生であつたが、禪師の坐下に來つては碌々たる、一箇の老雲水である。豆腐屋にも行けばおから買ひにも走る、味噌も摺れば筆も執る、鬼大拙が先師を遇すること殊更に峻嚴であつて、守拙などと、名を以つて呼ぶことなく、常に糞道心を以てし、適々經文を持して、疑を質せば大喝一聲、這の糞道心そんな物を何にするかと斥け、マゴくして、居れば忽ち噴拳を振て頭上を見舞ふことが常であつたが、然し此峻嚴なる手段は、我が道念を試みらるゝのであつて、其

當時は、餘り殘酷だと怨らんだ事もあつたが、後に至つてのそ熱喝噴拳は、實に是れ我れを教ふる慈悲の涙であつたのだと、先師も亦涙を揮つて宗演の爲に老婆せられた。斯の如く辛酸年を積み、大事了畢して、住院の始め「禪海一瀾」たる書を著はして、世に公にせられた。今日まで此書に導かれて、佛門に歸入したる、名士は、數ふるに違がない。左れば此浩然の一章は、先師の儒を捨て、佛に歸せられし鐵案であつて、最も、全力を以つて、研鑽されたのである。私は本章を講述するに就いて、先師の苦心を憶ひ起し、先師に對する報恩の一端とも思ふて、聊か家醜を擧げたのである。扱て俗に天と稱するものは無形無知無靈のものである。之に主宰たる者は楞嚴などに所謂妙明の真心である。今も亦然りて、此浩然の氣が、靈知あるのではなく、必ず彼の氣を主宰する妙明の真心あつて、良知良能の用を現はす。孟子はそれを養ふと云ふた。此養の一事を以て活用するのである。諸君よくよく熱察精思せよ。一朝一夕の沙汰

でない。彼の告子が心を動かさすと云ふは、其心を動かさぬと云ふ上に功を著けざるけれども、孟子は此心元と動かさる處より分曉してをる。此邊の優劣能くく玩味すべきである。先師曰く、凡そ天下の儒流孟軻浩然の章を讀んで、恕乎として過くる者は、眞儒人に非ず。山野崎昔此章に逢ふて求道の志を根ざす故に、後來常に歎じて曰く、大教未だ東來せざる以前、此の卓見あり孟子謂ふべし、生れながちにして之を知る者と。試に學者に問ふ、正文二十九字但し一字生知の全力を用ふる處あり、作廢生か那一字と、是等が先師室内の眞訣である。

七 信念の確立

本日は當山に於ける香山式併に津送式、所謂慶吊相兼ねて此の法筵が開かれたのである。私は先日以来飯田(信濃)を始めとして諸方に巡錫致しました。當山に於ても私に一場の法話をせよとの事ですから、喜で雨を

突て山に登りました。滿堂の善男善女の方々も一日の時間をそいで、此山に來たられたのは、殊勝なる心がけと云ふものである。滿堂の諸君は學問、智識の程度に於て、各異て居る。老若男女根機の等しからざる事は、顔の形の異なるか如くである。其方々に對して、一時間乃至一時間半の話を致して、満足を得んとするが如きは私の不得手なる事である。然し唯私が過去に實行した一片の赤情を、諸君の心中に受取つて貰へばよいのである。

近頃私が布教傳道中、他の有志信者の求めに應じ、家庭の信仰簡條を作つた。佛教は一方より見れば學問の如く、又一方より見れば宗教の如くである。其深廣なる事が諸宗教に秀れてをると共に、又其の短所ともなる。例へば佛教信者ありとせば、佛教は餘まりに深廣なる爲めに、其人は何を信すべきやと迷ふ。佛教は大海の如く漸く入れば漸く深しと、經文にもある通り、廣大過ぎて不便の場合がある。凡そ人間として常識

を具へたる人には、何人にも此れを行ひ得るものとしたいと云ふ主張は、佛教の到る所にある。依て今其れに貼らせました一枚の事に就いて、充分に話したいと思ひましたが、豫め此れを略説するとしても、二時間や三時間では終らないから、此家庭憲中の大切なる堅持信念、篤敬三寶と云ふ二句に就いて、話して見ようと思ふ。

堅持信念と云ふ事を話す前に、一寸云ふて置く事がある。満堂の諸君が、佛法に對する考はドーであるか、云ふまでも無く、諸君は先祖代々佛教信者であつて、墓も位牌もある事と思ふ。先祖代々遺傳的に佛教信者として生れたる吾々が、燈臺下暗しでマツ毛が近過ぎて見られない如く、諸君は一々に佛教信者かドーか、即ち如何に佛教を信するかドーかと尋ねると、中々答が明かで無い。頭の丸い吾々と雖ども此れにはマツク。如何なるか此れ佛教的々の大意と云はれたならば、容易に答は出來ぬ。自から坊主の様な顔はして居ても、デモ坊主と云ふ者が多數の中

にはある。昔は習慣を守り、古風を傳ふるとして、此れを儀式的にするのだと云ふ人があるけれども、此れは古い信仰である。二十世紀の今日には政治の思想も學問の思想も必要であると共に、宗教の思想も亦必要である。悲しいことには、物が古くなると、サビが就いて破れる。佛法も日本に渡來してから、殆んど千三百年にもなるから、極めて古ひ感じがする。例へば彼岸に一寸寺参りしても、寺参りは大抵デーさん、パーさんの持切りの役目の様に心得、息子娘は決して寺参りはせない。世間では佛心キツゴと云へば、沈香も焚かず屁もひらぬ、無氣力なる人の事と思ふて居る。佛教の頭無き人は、寺と云へば直に葬式、法事、或は陀羅尼を聯想し、甚しきに至ると、墓場、石塔と考へ、其結果、穴の中に埋められた死人、此れ佛教なりと合點するのである。此れは皆佛教に馴れたる弊習である。決して佛教の主意では無い、佛教は厭世的悲觀的なりなどと云ふて、政界なり實業界なりに、活潑なる活動をする青年には、何の必

要もないとして、少も佛教を解して居ない、既に佛法を解せぬ位だから、孔子教、耶蘇教は如何、及日本の國體と如何なる關係あるかドーかと云ふ様な事は、深く考へない。

私が米國で見たる事實は、或人が自分はスクールボーイ、日本の昔で云へば、塾僕となつて、半分は働き半分は勉強して、然かも其餘金は國の父母に送らうと云ふ様な、甚だ都合のよい考を以て、サテ米國へ渡つて見ると、米國には本願寺の布教場もあれば、日本人が立てた耶蘇の教會場もあれば、純粹に米國のチャーチもある。埋骨豈無墳墓地、人間到所有青山と云ふ勢で、渡米して假りに耶蘇教の教會場に籍を置くときは、先づ第一に君の宗旨は何であつたかと問ふ。此れは米國の各州共に宗教を大切にして居るからである。日本では社會現象の中に色々あるが、寺と僧などは尤も低きものとして誤解して居るに反し、米國では極めて大切に考へて居る。人間の自由は大切なるものであれば、誰ても此を要求

するが、殊に信教の自由は、自由中の自由である。故に米國人が第一に日本人に對して尋ねるのは、何宗なるかと云ふ事であるが、其時日本の青年などは無宗教なりと答へるのが普通である。無宗教と云へば、云ふ人の心持では、見識ある學者らしく見えるつもりであるけれども、聞く人は決してソ一は思はぬ。外國人などは此れを聞くと同時に、彼れは不道德者なりと判断をする。宗教と道德とは親子ならずとも、兄弟的關係を持って居るから、宗教を信じないとせば既に道德も守らないと思ふのである。ウェルリントン曰く、「宗教心無き者に智惠一途の教育をするときは技倆ある惡魔を作るなり」と。實に其通り宗教、道德と伴はざる智惠は人を欺き人を陥れるのである。既に不道德者ならば自己が目前の利益の爲めには、如何なる不都合でもやるのである。故に始めて米國邊に行つた青年は、自から無宗教者なりと云ふて、往々に失敗するのである。心ある米國人などは、耶蘇教の牧師たると否とに拘はらず、日本には佛教、

儒教、神道と云ふ東洋道德の主なるものがある。就中佛教の如きは、印度、支那、朝鮮、西藏、安南ビルマ、シヤム等にまで傳播されてあるから、大方諸君の祖先より續て何か宗教を信じたであらうが、何故に君は無宗教となりしかと尋ね反す。ソクラテスとかプラトンとかカントとかヘーゲルとかの如く、特別に哲學研究の結果、一箇の見識を有して後、無宗教なりと云ふのは價值があるけれども、一冊や二冊の青表紙を讀み或は些し英語の原書が讀める位の事で、大膽にも自分は無宗教なりなぞと云ふのは、大馬鹿者である。故に日本の中學位を出て米國に行き、かく問はれて始めて宗教の何物なるかを知るのである。即ち宗教は道德の根源であるから、其宗教に信念の必要なる事を知つて始めて、外地に於て宗教の何物なるかを覺るのである。然るに日本では年寄りが内に居ると、嫁の世話ばかりやいて五月蠅いから、まゝ寺へでも御參りにやるがよいと云ふ位で、言はゞ日本の寺は姥^{おば}持^{もち}山の様に思はれて居る。米國は

財力の上には上下の區別甚しけれども、宗教に至りては全く平等である。雷に夫れのみならず、外國は何處にも、一週一日の休日がある。印度では其日の事をウポーサタと云ふが、其休日には必用なる各交通機關まで往復の數を減じ心ある人になると家に使用する動物まで休まして、教會へ説教を聞きに行く。此れは獨り耶穌教ばかりでは無く、何れの宗教も皆其通りである。毎つも唯一家族世の事のみ考へて、齷齪として居るときは、心の上に、不知不識の間に垢が出来る、昔の語に命の洗濯と云ふ事があるが、此れは極めて大切なる事で、其洗濯は何を以てするかと云ふに、毎朝經を讀むとか、聖書を繕くとか云ふ事であるが、貧乏人などには、其れは困難であるから、一週一日休みの日を定めて、教會に行くのである、かく寺へ集まれる人を見ると、米國では老人よりも青年が多く、男よりも女が多い。女は感情に富み男は智識に富で居る、男女を智識上の比較をせるのは誤て居る。此れを見ると、見たのみでも同情を表

せざるを得ない。寺に来て見ると色々の音楽を奏して居る。此れは日本でも昔は同じ事ぢや。其起は隋唐頃の物であらう。宗教と音楽とは密接なる関係がある。然るに其れを持ち出して葬式斗りに用ゐた爲め、何かツマランものゝ様に思て來たが、若し此れを結婚式にでも用ゐた習慣が有つたならば、甚だ宜敷かつたと思ふ。日本の寺でも檀信徒相合して、オルガンなり、ピアノなり具へて置くがよい。宗教はかくの如く命の洗濯である。宗教は寺のみならず學校にも行はれてある。先づ私が實見したカリホルニア大學、スタンフォード大學、シカゴ大學、コロンビア大學、ハーバート大學、エール大學の如き何れも皆チャーベルと云ふものが有つて、日曜毎に牧師の説教がある。英國にてもケンブリッヂ、オックスフォールド大學の如き皆同じ有様である。

扱て道德の本源はと云へば、無論宗教である。宗教は各種の哲學に依つて立てられてある。日本人は澤山な宗教を持て居るから、其何れを取

るべきかに迷ふて居る。教育の御勅語の意味が、日本の各宗教に依つて唱へられてをる。唯一つ注意すべきは、宗教と云ふも個人のみ安心を與へる宗教と、國民としての一般に安心を與へる宗教とある。其れには佛教と耶蘇教とであるが、耶蘇教は日本の國體と未だ少しく合せぬ傾がある。唯安心を得るのみならば、耶蘇教でもよいけれど、然し日本では日本としての國體があるから、此の爲めに、耶蘇教は聊か差支へる。佛教儒教にては是非共歴史的に一つの佛なり神なりにならねばならんとは云はず、所謂八百萬の神にて、自分の好むものを信する事が出来る。換言すれば佛教の如きは、統一的汎神教である。此の故に宗教は、又社交上學問上にも大切である。然るに或心無き者は、自分は米國に身を置いてをるから、マー耶蘇教信者と云へば都合がよいから、ソウして置く云ふ様な、或一種の目的の爲に偽信者となり、一度び目的にして達せらるれば、直に尻喰へ觀音では無くて、尻喰へ神サンと云ふ様な信者がある。

故に私の知れる或西洋人は、日本人は輕薄だと云ふたが、實に當つて居る。此種の人は日本人悉くと云ふ事は出来ないけれども、或者は訖度此主義を持つてやつて居る。古來日本には佛教も儒教もあるから、日本人は其れを信するがよい。

宗教と云ふものは、未來の事は兎も角、現在の黒土の上で活動すべきものである。舊式の佛教家が、早く極樂往生せよと説くのは、恰も働き盛りの壯年に、早く樂隱居して息子に財産を譲り、酒を飲んで遊んでをれと云ふのと同じ事である。此れ一の病的利己主義である。佛は未來に於て極樂往生したければ、現在に於て大に働けと云ふて居られる。死人に引導渡すのも大切だが、活きたる人に引導を渡すのが尙ほ更大切である。故に歐米にては、社交上には勿論、政事上の事にまで、宗教は密接なる關係を有してをる。露國には希臘教あり、英國にはチャーチ、オブ、イングランドなどあつて、其宗教は皆國教と成つてある。此に至れば冠婚

慶吊悉く宗教的である。其他家庭も社會も、理屈ばかりで宗教的趣味の無いときは、マランダ沙を噛み蠟を食ふと一般である。日本でも文明の進歩と共に、學問智識が開けるから、従つて宗教も亦大切である。社會には地主が大切である如く、貧乏人も亦大切である。若し地主と小作人が、互に理屈ばかり云つて居ては、調停するときに無い。然るに其れを調停して、上下貴賤圓滿に暮すには、宗教が大切である。宗教の本領は、仁心、愛情、慈悲などと云ふ事になる。宗教の調和の爲めに、社會も家庭も、牡丹餅を食ひアイスクリームを飲むが如く、清き新しき甘味を有して居る。昔は宗教を以て鼻の先きで笑つて居たが、今日は私の様な小さい者にまで、宗教を教へて呉れと云ふて來る。人間は妙な者で、家をもち學問が出來、美しき妻を持つて、肉體的要求が満足せられると、従つて宗教の要求が起る。如何に衣服はあり、位はあり、馬車はあるとも、換言すれば充分に人爵は具はつて居ても、何時死するか知られない。如

何に肉體的満足を得て居ても、何時妻子に分れて、何時此世を去るかも知れない。知らぬ間に年寄て来る。此自然の要求として、年を経ると共に精神上の要求を取らねばならぬ。ヨシ身は死するとも、末代までも死せざる法身を受くる事が必要である。此心は無碍光或は無量壽と云ふが、此れが最も大切である。近頃は追々と政事家だの議員だのと云ふものが、此方面に力を入れる様に成つたが、小學校の教師などは、まだ坊様と教師とは全く別物の様に思ふて居るが、西洋は姑く措き、我國では昔は宗教と教育とは、並行して居た。其證據には、昔の學校は皆寺に在つた。曾に其れのみならず、郡役所、村役場さへも寺に在つた。徳川氏の時代には、政事上の機密の顧問をしたのは、皆坊様である。故に或方面より云ふと、時の宰相も政事家も皆坊様の弟子である。家康、謙信、信玄、重盛、正成、時宗、時頼、田丸將軍、更に進では奈良平安の朝に於ては、上天皇陛下より皇族方まで法皇あり、法親王あり、尼様も有つ

た。殊に聖徳太子の如きは、宗教、學術、禮儀、製作、の上にまで、佛教を用ゐられた。佛教が太子の力に待つた事は大なるものである。諸君が親代々の昔に及ぶならば、一人と雖も無宗教者は無い筈である。今日よりは追々文明が進むから、人並以上に出でんとするには、多くの頭を用ゐねばならぬが、多く頭を用ふれば、之を安んせしむるものが大切である。勞働するときは、食物を取て肉となし、血となす必要がある如く、心の仕家とも衣服とも食物ともなるものは、宗教である。道は須臾も離るべからずと古人の云ひしが如く、宗教や道には、人間は一日たりとも離れて生活する事は出来ない。若し大幻術師か大魔王が現はれて、人間の意識内より喜怒哀樂等の情を取り去る事が出来れば兎も角、此れを除き去られぬ中は、到底宗教も失せられない。鳥鳴き花咲く、觀じ来たれば皆宗教ならざるは無い。ソロモン王の榮華も、一の百合の花には及ばざりけりと云つたのも、此の邊の消息を洩らしたるものである。

故に若し此の宗教を得たならば、人間は大安心大満足を以て、人世を渡る事が出来る。此心を以て佛に對すれば信仰となり、親に對すれば孝行となり、夫に對すれば貞節となり、兄弟に對すれば信愛となる。さて實は此れから本題に入るのちやが、餘りに道行きが長くて、時間を費やしたから、以下は略説して置く事にする。堅持信念とは何か我々が信ずるもの、即ち智識學問以上に信ずるものである。本堂を建てるには堅き地盤が必要である如く、如何程學問あり智識あるものでも、一度び地震や火事のあるときは、忽ちに心が左右上下に動顛するが、其の動顛する心をして動顛せない様にするのが信念の力である。次に篤敬三寶とは、歴史に就いて見ても、聖徳太子が作られたる十七憲法の中にも、篤敬三寶とて佛法僧を崇敬せよと云はれてある。此れ等の事を十分に講じて見たいが、之を講じ出すと餘りに長くなるから、今日は此れで止めて置く事に致します。

八 美としての女性

只今、當校(信濃下伊那高等女學校)の校長様より御紹介下されました通り、私は釋宗演と申す一個の禪僧であります。今日は御求めに應じまして約一時間ばかり御話致す事になりましたが、さて何を御話してよいかと、色々商量致して居る折柄、今朝二三の方々と當地の公園なる今宮へ散歩に参りました途中、幸に一つの演題を拾ひ得ました。其は極めて簡単に漢文字にすれば唯一字の「美」と云ふ事を目前に得たのであります。此の「美」と云ふ事を種々なる方面より御話し致さうと思ふが、まだ充分に組織立てゝありませんから、思ひ浮べるまにまに御話し致します。

斯うシテ見受ける所、諸子はまだ小學校より直に移て來られた可愛しき小さい人々が多い様でありますから、最も平易に御話ししやうと思ふ。全體、私は平日學者とか學生とか政治家とか云ふ様なものばかり相手に

して居りますから、其の言ふ事も亦哲學とか科學とか坐禪とか議論とか云ふ様な理屈ばかりヒネクツて居るのが癖だが、今日は出来るだけ其れを避けて御話しますのであります。其れに就いて思ひ起すのは、可愛らしき諸姉妹に對する反對として、自分の身の上の事である。實に幸か不幸かは直に判斷する事は出来ないが、私自身は世間並の家庭を持たない。若し強いて持つて居ると云へば、變則的の家庭である。血氣盛りの子弟、頭髪のある者無き者、他より貰はれたるもの、學者の口吻を借りれば書物を妻とし、理屈を友として居る者ばかりの相手である。私は既に五十に垂むとする年を進めて居るが、若し是が濫き家庭を作つて居たならば、子供や家内や親兄弟と共に、一家團樂と楽しく愉快に暮したのである。然るに私の過去の經歷は其れに違はず大きくなり、老年になりかけて居る。唯親子兄弟姉妹の仲間には有たのは十二歳位まで、其の後は出家となり、多年辛酸苦行して以來、不思議にも一昨々年米國に渡り、米國人

の家庭の中に此の日本的の坊様が加はつて、約九ヶ月間ばかり圓滿なる家庭に暮しました。けれども此れとても、亦私自身の妻や子を相手に致して作つた、家庭ではありませぬから、矢張り變則的である。かく私は常に變則的の家庭にばかり、人と爲り、妻を持ち子を持つた事がありませぬから、私の御話をする中には、諸姉の腑に落ちぬ事、當らぬ事が澤山あらうと思ふ。

然らば舊式的の佛教家、換言すれば直接には家庭と關係無き佛教僧侶と女性との關係は、どうかと云ふに、決して無關係では無い。况んや宗教の廣き意味より見ると、女性と宗教には、極めて親密なる關係を有して居る。佛教僧侶が如何なる態度を以て女性に對せしかと云ふに、「四十二章經」と云ふ御經に依ると、(原文の意味を取る)

我々沙門は、老いたる婦人に對するときは、其を見ること母に對する如き心を以てせよ、又我より年長けたる婦人に對するときは、我姉に

對する如き心を以てせよ。

我より年若き婦人に對するときは、我が妹の如くに感せよ。又我より幼稚なる婦人に對するときは、我が娘の如くに感せよ。

と教へられた。女房子供のある時は、足手纏ひとなり、布教の妨げになるから、妻を持つたと佛か其一部の弟子、即ち比丘衆の爲めに説かれたのであるから、此の中には女房に對する心持ちは述べてないけれども、自から推して知る事が出来る。故に今私がズラリと並で居らるゝ諸姉妹に對するの、此の心持ちに外ならない。此れ既に一つの愛ぢや、愛にも色々あるが、穢れぬ神聖の愛ぢや。同情或は忠恕と云ふもよい、佛教では廣義に解して、大慈大悲と云ふてある。今私が諸姉妹に御話し致すのも、亦此の大慈大悲の心を以て致すのである。私は諸姉妹よりも年若い居るから、諸姉妹は私を父或は伯父様と云ふ考へを以て迎へて貰ひたひ、然らざれば折角の御話も形式的義理一片のものとなつてしまふ。

「美」と云ふ事を御話し致すのだが、此れを心理學的哲學的に御話しするのは、甚だ六ヶ敷くなるから、今日は御話し致しませぬが。然し「美」とは眞善美と並び用ゐられて、人間畢生の理想を示したものである。凡そ人間が有らゆる方面より、歩武を進めて、自分の理想に到達せんとする、其理想に名を附けると、此三字が最も意味を明確に現はして居る。眞善美と云へば如何にも三つの異性質のものが、各々人間の心の中に城壁を構へて居るかの様に思ふが、其根本的態型より見るときは、同一物の異方面を示したるものに外ならぬ。眞の方面より見て「眞」と云ひ、善き方面より見て「善」と云ひ、美しき方面より見て「美」と云ふたのである。恰も一箇の富士山を甲州より、駿州より、其他の州々より見て、各々異なる方面を擧げたと同じ事である。故に此三方面は、其中どれでも一つを擧ぐれば其餘の二つは、イッでも就いて廻はるのである。此邊の消息は詳しく云ひ出すと、切りが無いから止めとして、扱て今日御話し致す「美」とは何

ぞと云ふに、平易に云へば鳥鳴き花咲く皆是れ天然の美である。春になれば鶯が梅の小枝でホーホケキョウと鳴て居る。現に其處の軒端には雀が千代千代と鳴て居る。ホーホケキョウや千代千代や此れを音楽と見るならば、ピアノやオルガン以上の、立派な自然の音楽である。古人は「都ぞ春の錦なりけり」と云ふたが、其の春の錦は自然に近き田舎の春に於てこそ見られる。夏になれば天地悉く滴らむばかりの緑と化し、秋になれば人間ウザにては到底及びもつかぬ紅葉の錦を織り出し、冬になれば白妙への銀世界、此れ皆天地自然の美ならざるは無い。其の他天際日上り月下るは固より、更に廣義の解釋を下せば、口に甘き味を食ひ、身に柔き衣を着ける、凡べて美ならざるは無い。天地の間若し我を假定するとせば、我は自然の美を以て圍ひつめたる、大バノラマの中に徜徉し居るのである。滿身美的觀念を以て四方を展望すれば、美は梅や櫻の花ばかりに独占されては居ない、到る處「これは」とばかり花の吉野山「ちや、

人間として爲すべき事を爲し、行ふべき事を行ひ、清淨無垢の心を以て進めば、人世悉く美人の權化である。哲學や宗教にて、特別の理屈をヒネクラすとも、天地自然の美は、此所に現はれて居る。パラダイスとか、神の國とか、天國とか、極樂とか云ふ所がありとせば、其は此黒土の上の外には無い。黒土即ちパラダイスであり、神の國である、天國である、極樂である。

かくの如く論じ來るときは、天地悉く美のみとなり、却つて人をして美を知らしむるに苦むから、ソコデ佛は生物界中で特に婦人を把握して美の標本とせられた。凡そ人類界を見渡すと、一方は男性的より成り一方は女性的より成て居る。人間の心、形、作用、凡べて此二方面より成立して、一方は男性的に硬く剛く、一方は女性的に軟く美はしく出來て居る。若し眞が男性的なりとせば、女性の特色は美にある。換言すれば女は人間世界の花で、其花の中にも分つて見れば、櫻の花の様な娘もあ

り、梅の花の様な娘もあり、梨の花の様な娘もある。此れ實に美の極點である。「桃や櫻をこきませて」と古人の謂つたる如く、皆一様では比較が取れない、區別のある所に美の價値がある。顔が長からうが短からうが、鼻が高からうが低からうが、ソナナ事には少しも頓着しない。色に譬ふれば男は緑にして女は紅である。佛は此の美はしき婦人を見立て、如何様に解剖せられたかと云ふに、「玉耶女經」と云ふ御經の中に、

容顏の端正なるを美と名けず、心行の端正にして人に愛敬せらるゝを美と名く

とある。美と云ふ事を分つと形の上の美と、心の上の美との二つになる。形の上の美に熱心、寧ろ腐心するのは女であるが、如何に心を用ひて容顏のみを美はしく作つても、其れはトナモ永久に存続するもので無い。

花の色はうつりにけりないたづらに、

我身世にふるながめせしまに、

と小町のはかなみたる如くである。三日も湯に入らねば首に垢がつく古い衣服を着て居ればシミが出る。泣けば涙が出るし、笑へば歯がたれる。形の上の美は一時的にして永久的で無い。楊貴妃の末路や小野小町の末路は、何れも此事實を證明して居る。斯う云へばとて私は、全然形の上の美を排斥するのでは無い、形の上の美に就いても大に注意せねばならぬ。即ち男もであるが、女は特に心を茲に用ふるの必要がある。奢侈、虚飾ならざる程度に於て容顏衣服等に心を用ひて、無暗に粗暴に流れる様に注意せねばならぬ。自分は前年實際九ヶ月の間、米國婦人の舉措進退を觀察したが、彼等の行儀作法に注意する事は、中々用意周到のものである。其用意を一言に盡くせば、他人に不快の念を起させないこと云ふに止まるので、若し他人に不快の念を起したならば、其は既に其れだけ公德を妨げるのである。寝るとき起さるとき、特に食事の如きは常に家内一堂に會して食卓を圍み、快談の中に面白く終るの習慣である。

最も私の暮しました家庭は米國の上流の家庭であるから、或は下等社會の家庭には亂暴粗雑なるものもありませうが、兎も角、私の居た所の家庭の食事の際などは、話をするにしても政治上の事、宗教上の事などは勿論、況んや腰より下の事などに至つては決して云はない。少しでも腰より下の事など云ふ者は、紳士淑女の仲間入りが出来ないのぢや。之に反して日本では立派なる男が、立派なる家に客に招かれ、立派なる物を見ながら、貴婦人の前などにて、腰より下の事など云ふて更に耻づる色無く、然して之を傍聴して居る婦人なども亦、却つて罪が無くてよいなぞと喜んで居る。此れ既に美を損じて居る。故に歐米人の會話は、旅行とか、神話とか、御伽噺とかをして相手を嬉々として樂まして居る。人間の美は唯に顔のみならず、手足、腹、肩、頭等凡べて格好した所に現はれる。少し位顔の濫皮がむけて居たとて、ソナ事で美人と云ふ事は出来ない。言動行爲、坐作進退、悉く具はつて始めて美人と云ふものだ。

然し心の美を忘れては話にならぬ。佛が「玉耶女經」に説かれたのは此主意である。如何に容顔は美はしくとも、心が美ならざれば美人では無い。此御經の主人公となりしは玉耶と云ふ婦人である。此婦人は須達長者と云ふ富豪にして且つ慈善家の嫁である。彼女は當時天竺第一の美人なりしと云ふが自慢にて、夫に事へ親に事へて、常に不遜の行爲が多かつた。全體、女子と小人とは養ひ難しと孔子の云はれた如く、女と云ふものは、少し位の容顔の美や、少し位の智識があれば、直に鼻にかけたがるものであるが、玉耶も亦此數に洩れなかつた。ソコデ長者は佛に願つて之を矯正せしめんとしたので、爲めに佛の説かれたのが、此「玉耶女經」である。容顔の美は如何に花を欺くが如くでも、心の美にして具はらざれば、三文の價値も無い。心の醜とは動もすると婦人に有り勝ちなる怒り易き事、嫉妬、後悔、吝嗇等である。若し此等を一の寫眞にでも撮る事が出来たならば、獅子の様な鼻、象の様な目よりも更に醜き事であらうと思ふ。

佛は人の心を見る事、其の貌を見るよりも明であつたから、玉耶よ、人間は貌は如何に美なるとも、心が美ならざれば、眞の美人と云ふ事は出来ないと説かれたのである。

今日、諸姉妹は學校に在つて日々善き事ばかり教へられて大きくなり、他日人の妻となり母となり、かくて遂に老嫗となつて死に至るのであるが、今諸子が學ばれつゝある算術や歴史や地理は、唯だ其れとしてのみ知り置くのみでは、何の役にも立つものでない。他日人の妻として母として、實際世間に起つ上に實行してこそ、始めて其價值があるのだ。幼き人は兎も角、此中には既に人の妻たり或はたらんとする人々もあろうから、トツクリと此邊に注意をして貰ひたい。

今日は日本も教育の喚び聲が盛に成つて來たが、就中、女子教育は最も人の注意を惹いて居る。此に就いて考へねばならぬ事がある。私の見た範圍の學校に就いて云へば、官立公立の學校に在つては、上に教育の

御勅語があつて、教育の方法が一定して居るから、智識を進めるのみならず、婦道、婦徳を養ふ事が出来る。他の私立學校に至つては學力は或は官公立の學校に劣らぬかも知れぬが、或宗教的主義の本に建てられたる女學校には、能くべく恐るべき現象が認められる。此は教育家は勿論其の裏面に在る所の吾々宗教家の如きは、最も注意を加はねばならぬ事と思ふ。或一種の私立女學校は、其の主義は、女子の獨立さへ計れば足れりとして居る。女子も一個の人間なれば、男と同等に獨立の方法を計ればよいとして居る。欧州地方、異に米國が甚しく此の風を鼓吹して居るが、凡べてコンナ校風に依て養成された女子を見ると、極めて奇怪千萬なる現象が見られる。即ち自己本位、個人本位となり、我れ獨り満足すれば、兄弟、朋友、親戚、親子、國家、社會も更に眼中に無い。決闘でも喧嘩でも、自分一人さい満足すればよいとして居る。所謂セルフ・イシユチスである。東京邊の娘は兎角に嫁入りを嫌ふ傾向があるが、深

く入て尋ねて見ると、斷然、飽くまでイヤだと云ふのでは無い。唯我が思ふ程の夫、思ふ程の家が無いからと云ふのである。換言すれば理想的の夫、理想的の家が無いからと云ふのである。人の妻となれば家政を執り育兒を司り、夫に従ひ舅姑に事へ、或一種の自由を拘束せらるゝがイヤだと云ふのである。此れは個人本位の女子教育の結果に基く。外國は姑く措き、日本ならば日本の國家を土臺として云へば、斯くの如き女子教育は最も恐るべきものである。即ち女子をして片輪的變則的に教育したならば、社會否近き日本の女子其者の前途をドースルのか。去る年横濱に關東聯合教育大會の開かれたとき、私も其の末席に列して居りましたが、其時高等師範學校の校長加納様は此意味の事を、涙をながし、机をたゞいて絶叫致されました。私も此れには最も賛成したのであります。唯才藝や智識のみに充たされて婦道を知らぬ女子の末路は、恰も女壯士の様な腕白者となつて了ふ。此れは唯我々日本の兄弟のみが悲むのでは

ない。外國人と雖も我が國の或種の女子教育の方法に就いて、其誤れる事、危険なる事を慨嘆して居る人が深山にある。彼等の謂ふ所に依ると、日本には古來婦徳婦道の立派なるものがあるにも拘はらず、其を捨て歐米の教育法のみ依るのは、主客顛倒したヤリ方だと云ふのである。素より智識の比較に至つては、日本婦人は到底西洋の婦人に及ばない、彼等は親の親、先祖の又先祖と云ふ様に、代々遺傳的に教育され來たりしものである。然るに日本の新式女子教育は、漸く我々の親時代頃から起たのである。故に我が女子の智識の程度が彼の女子の程度に及ばぬと云ふのは、明なる事實であるが、然り其の婦徳、婦道の點に於ては彼に優る事數等なりとも、斷じて劣る事は無い。例へて日本婦人の美點を一つ二つ示せば、平時に在つては、從順、忍耐、優美にして貞淑なるに反し一朝非常の時に至れば、從順は勇威となり、忍耐は剛毅となり、優美は壯烈と變するが如き、確に西洋婦人の企及し能はざる所である。西洋婦

人も貴族社會に在つては、中々我儘勝手をコネクルものだ。従つて假令、其意味は異なるにしても、決して純潔では無い。日本婦人の操正しく、從順、優美、貞烈なる所は、却つて西洋婦人の羨望して止まざる所である。然るに今日日本の或一種の女子教育を見ると、英國婦人を學て然かも英國婦人ならず、佛國婦人を學で然かも佛國婦人ならず、然らば日本婦人なるかと云ふに決してソ一でも無い。所謂似而非なるアイの子である。近くは日露戦争に於て偉大の殊功をたてたる、東郷大將に就いても知る事が出来る。大將は如何なる婦人を母として生れ、如何なる婦人を妻として居らるか、何れも今日の所謂西洋式の教育を受けられては居らない。寧ろ主として日本固有の婦道に依つて養はれ、婦徳を立てたる人である。其他奥、乃木、故兒玉各大將の如き何れも皆然らざるは無い。願ふに日本的婦人の氣象は、建國以來、親より子に、子より孫にと云ふ如く、先祖代々、血を以て血に傳へ、肉を以て肉に傳ふ、所謂以心傳心

底に傳はり來りしものである。例へば君に忠を盡くすとか、親に孝を盡くすとか云ふ事は、實に日本特有の名物であつて、未だ萬國に其比を見ざる所である。西洋に就いて見れば、君臣、父子同等の權利を有して居る。子と雖も親に食費を拂ふて、同棲して居るのだから、子は當然親に従はねばならむと云ふ理由を見出さない。一朝事起れば、親を法廷に訴ふる位はやり兼ねない。其他臣の君に於ける、妻の夫に於ける皆此習慣に依つて養はれて居る。だが日本に於ても、婦徳婦道を失はれたる家庭に在つては、往々にして此種の事件を見出すに苦まない。

要するに日本婦人が西洋婦人の眞似をして、此に似ざる程醜き事は無い。此れ即ち西施の顰にならふと云ふものぢや。然らば一番、心の美とは何かと舊に戻して見ると、一言に盡くせば大同情と云ふ事である。換言すれば、「なさけ」、「思ひやり」と云ふ事である。此れ婦人の美點であつて然かも亦特性である。此心が宗教と婦人との關係の切れぬ所である。感

情事ろ情操は男子よりも婦人の持ち前である。加賀の千代が

朝顔につるべとられてもらい水

と云ふたが、此意味はヤサシキ婦人が朝起きて水を汲まうとて井戸端に行きし所、朝顔が嬉しうにニッコリ笑て井戸のつるべに捲き附て啖て居たので、イザ自分さへ善ければと此を取りのけて水を汲むに忍びなかつたと云ふのである。婦人の同情心が、朝顔に對して遺憾無く現はされたる所を見られる。此心を以て夫に對すれば貞操となり、親に對すれば孝行となり、朋友に對すれば信となる。げに婦人の同情心は、花の美よりも尙ほ美はしきものである。太田道灌が狩野途中夕立に逢ひ、雨具を借らうとして、傍の茅舎に入りし所、妙齡の一女あり、山吹一枝を手折りて、盆に載せて出し、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだに無きぞかなしき

と、一首をそへた。さすがに太田道灌も此れには一本マイツタのである。如何にも優美なる乙女の所行の爲めに、其れが動機となつて後日の歌人として、太田道灌を作り出したのである。茲に至つては、既に理屈の境界を脱したる、一種の「インフリュエンス」を有て居る。観光の外人が横濱へ上陸して先づ街頭到る處に、ニコ〜として如何にも楽しげに、母子相携へて歩行して居る日本婦人を見ると、一種云はれぬ美感に打たれると云ふて居る。富士山の美や琵琶湖の美は、共に日本特得の自然美を現はして居るけれども、然かも這の自然美の温き懷に養はれたる日本婦人の精神には、美より出で、美以上の美點を有して居る。日本婦人の手先きの仕事の如きは、到底西洋婦人の企及し能はざる所である。従つて其文學、美術、繪畫、彫刻の如き固より其全體とは云ふべからざるも、一種特別の妙趣があつて、最も善く優美なる婦人の特質を示して居る。換言すれば、政治、宗教、學術、教育等の點に於ては西洋婦人に譲るも

唯日本婦人古來特得の美點たる婦道婦徳、さては其同情心に本づく美術の現はれるに至つては、書をかいたと云ふよりも、心をかいたといふべく、物を彫たと云ふよりも、心をほつたと云ふが適切である。

之を要するに、女子は學問すると共に、其を直に女子の美點たる婦道婦徳の上に、遺憾無く實行して貰ひたい。心の美と形の美と、影の形に従ふが如く、響の聲に應ずるが如くに、兩々相對して助長せしむる事を得ば、以て茲に完全なる理想的の婦人を見る事が出来る。蓋し今日世間の女子教育も、其が根本の方針は、到底此れ以外に出づるものではないと確信して居るのである。

九 坐禪の用心

宗教が如何なるもので、國家、社會、或は個人と如何なる關係を有するかは滿堂の諸君が既に知らるゝ所と思ふ。佛教が欽明天皇の十三年、

始めて我が國に渡來してよりこのかた、佛教の最も盛に行はれたのは、聖徳太子の御時である。太子は政治、宗教、教育、美術、立法、行政の上に於ても、一新機軸を立てられたる御方である。太子は其頃に於て既に十七憲法の中に、

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。四生の終歸、萬國の極宗、何の世何の人が、是の法を貴ばざる。人尤も惡きもの鮮し、能く教ふるをもて従ひぬ。其れ三寶に歸せずば、何を以て枉たるを直くせむ。

とさへ云はれてある。十七憲法の中には、佛教を以て未だ國教とまでは云はれてないが、事實は殆んど國教とせられたこととなつて居る。其後奈良朝を経て、平安の奠都に至るまで、佛教が政治、文學、風俗、習慣の上に多くの貢獻をしたる事は、争ふべからざる事實である。弘法、傳教を始めとして、其他幾多の偉人の現はれたる事は正に此證據である。従て佛教は益々朝廷の保護を得て、旭日東天の勢を示した。然し平安朝

以來、一進一退、一上一下、鎌倉室町等の時代を経て、徳川氏の末葉に至つては、佛法は殆んど地に落ち、僅に餘命を中流以下の、下等社會のみ残すの有様となつた。即ち下等社會の人にのみ、安心を與へる道具となつたのである。

されば今日は兎も角、昔の佛教の史的事實を見ると、佛教が國家に及ぼせる感化は、固より日本全國の人心を支配すべき使命を有せしものは、實に佛教のみである。故に佛教と國家との關係は、恰も今日露國の宗教が其國家と關係せる如く、英國の宗教が又其國家と關係せる如き有様であつて、實に人間精神の歸着を與へる點に於ては、大勢力を有して居たのである。然るに佛教は追々儀容禮式のみを重んずるに至り、葬祭是事とするに流れて、其本分たる人心感化の方面をば失ふに至つたのである。延て今日に至るまで、佛教の仕事は葬祭にありと心得、死人の濟度はするものゝ、活きたる人の濟度は出來ない様になつた。就中明治維新の大

改革の打撃の爲めに、國民精神の感化と云ふ根本的方面は忘れられたのであるが、此の十四五年以前よりは、又追々と其根本に立ち歸り、東京に在つても學者、政治家、實業家などが宗教を以て度外視す可からざるものとして、大切に思ふ様に成て來た。此の度の如きも亦當地の有志諸君の請に應じて喜で來たのであるから、諸君は其精神上に何か得る所が無くてはならぬ。即ち一のインプレッションを得て貰ひたい。佛法は佛法其物の爲めに弘めるのでは無く、社會とか國家とか、所謂世道人心を救濟せんが爲めに生せるものである。唯に佛教のみならず、耶穌教、ブラフマ教等何れの宗教と雖も皆此主意に基きたるもので、假令、坐禪するも題目を唱ふるも、等しく社會國家の上に利益を與へてこそ宗教の宗教たる價值があるのだ。古き習慣や儀式のみに依て居ては、何等の意味も無い。宗門宗派の一種のヒガミを排し、僧たると俗たるとの區別を除きて、家庭なり社會なりの上に、充分の感化を與へて貰ひたい。

禪宗じやとて普通世間の人に分らぬ事、考へられぬ事を唱へたのでは無い。云へば云へる事、考へれば考へられる事、實行すれば實行せらるゝ事を傳へたのである。然るに徒に尊大に構へて居るのが、禪宗の特色なるかの如くに思ふて居る者があるが、此は大なる誤謬である。聖道門は都べて貴族的のものなりと考へたる時代が有つたが、其歴史的事實を尋ねて見ると、其始めは専制政治時代であつたから、所謂依らしむべく知らしむべからずと云ふ主義であつた。故に士農工商の區別を爲し、階級制度を重んじて居た。禪宗の如きも、亦此風を受けて、専ら貴族者流の間にのみ行はれ、無暗に一喝を吐たり、棒を振り廻して只峻俊に構へるのを以て、得たりとして居た。然るに今日の如く人間の智識に依て、凡べてを考へようとする時代に至つても、尙ほ舊式を墨守して居るのは、愚の至りぢや。白隠禪師一代の説法の如きは龍の水を得、虎の山に靠せるが如く縦横無碍自在にして、決して陀羅尼的漢文的の説法のみをせら

れなかつた。「塵たゞき」と云ひ、「辻談義」と云ひ、「粉挽歌」と云ひ皆此種類である。古人も意は毘盧の頂額を踏み、行は童子の足下を證すと云はれた如く、理想は務めて高遠に上らしめ、實行は極めて卑近に置くがよい。即ち理想と實行とは反比例である。吾人は其の形式に拘泥せず、古人の精神を體得したならば、最早や禪宗の悟りも、世間の道理も、決して異たものではない。左れど禪宗の悟りは直覺的である。論理の法則に従ひ、演釋歸納の推理を用ゐるのは、之れ學問的研究である。水の素質を説明し或は火の燃ゆる所以を説明するのは、皆此の類である。勿論禪宗でも説明を全然排斥するのではない、唯其は第二次のものとなし、先づ最初本體其物の上に手を下し、單刀直入此れはドーだと洞破し、次で其何物なるかを説明せんとするのである。故に或は即身即佛と云ひ、或は見性成佛と云ふのである。即ち禪宗の本義は直に宇宙の本體何物ぞと把握するにあるから、難行苦行の如きは其目的に達するまでの手段に過ぎない。

既に手段なる以上は必ずしも難行苦行せなくともよい、佛陀の如きは經文の上に於て屢々之を排斥せられて居る。印度に於ては今日尙ほ盛に種々なる難行苦行の有様が行はれてある、或は五熱を以て身體を焦がしたり、或は一本の棒の上に片足を以て立つたり、乃至片手にて木の枝に吊り下つたりなどするものは、皆難行苦行である。彼等は、肉體を苦める事に依て一切の煩惱を制し得るかの如く、誤解して居る。然し乍ら一方より見ると、大なる宇宙の本體を悟りて此と同化し、世界の安寧人類の幸福を致さんとする爲めには、小なる自分自體の苦樂位は悉く忘れて、或る程度迄は難行苦行もするがよい、寧ろせねばならむ。於是乎、マクシムム己が必要ぢや。然らば禪宗ではドーかと云ふに、先づ坐禪をして工夫を凝らすのである。換言すれば禪宗の實行法は、簡單なる坐禪と云ふ事より始まるのである。

坐禪には二つの方面がある、一は心の坐禪、他の一は身の坐禪である。

白隱禪師の如きは「夜船閑話」等に於て、最も親切に身の坐禪と云ふ事を説かれてある。何故身の坐禪をするかと云ふに、身體は素より心に依つて、左右せらるゝものなれども、亦心却て身體の爲めに支配せらるゝ場合もある。故に先づ身の坐禪に依つて、身體の動作を正しくすると云ふ事が必要である。元來坐禪と云ふ熟語の起りは梵漢兼舉と云ふて、梵語と漢語とを併せ用ひたるものである。即ち坐とは漢語にして禪とは「チャーナ」と云ふ梵語の音を其儘に移したるもので詳には禪那と云ふ可きである。支那には之を靜慮などと譯してある。偕て坐禪の坐とは不動と云ふ事にて、頭は頭のなりに、脊骨は脊骨のなりに、手足は手足のなりに、各々其の位地を正しく保たしめる事である。既に身體の各機關共に正しく其所を得れば、身體の位地は茲に正しくなり、従て氣海丹田と古人の云はれた如く、自から臍の下に力が充ちて、シツカリと工夫を凝らす事が出来る。近頃の青年の人は、考へると云ば唯頭のみで考へるのだと思つて居るが、

更に西洋の進歩したる心理學者に聞くと、頭のみで考へると思ふて居たのは古い説で、寧ろ全身で考へねばならぬと云ふて居る。頭ばかりに重きを置いて考へると、却て頭の中が硬澁して腦病となる。彼の學生などが動もすると腦神經を惱みて青白く瘦せて居るのは、皆頭ばかりで考へんとして、徒に其中樞を勞するが故である。假りに身體を二分して見れば、首より上の頭と首より下の腹となる。故に考へる時には其頭よりも首より下の腹、言ひ換へれば心で考へるが大切だ。例へば散歩するときには就いて見ても明である。散歩するときには、主として首より下の腰や足などを多く働かす、従て首より上の頭が輕快になつて来る。乃ち運動の結果心臟とか肺臟とかに十分酸素の吸入を増して来るからである。故に身體全部自から練々たる餘裕を生じ、氣分何となくノンビリとする。此れ抑も坐禪の始めであつて、坐禪の方法は期せずして、今日進歩したる生理學心理學の説く所と、一致して居るのである。故に諸君は禪宗を修

行して見やうと思ふならば、力めて此の習慣を附けて貰ひたい。或者は坐禪と云へば、必ず何かの公案でも無ければ全然出来ないものゝ様に考へて居るけれども、此れは全くの誤解ぢや。坐禪と云ふものはソナ窮屈千萬なものでは無い。モット自由自在なものだ。故に此心がけにて卑き形而下の所より、實行を始めて、追々高き形而上の方面に向ふの習慣を附けさへすれば、爲す事の力ある者、進む事の力ある者は、必ず忙中閑日月を得るものだ。自分は兎角多忙で坐禪する暇が無いなどと云ふ者は、ナマケ者の云ふ口癖だ。ナマケ者に限りて自分は遊で居ながら、尙ほ時間が無いとか餘暇が無いとか云ふものだ。我が禪宗否大乘佛教の坐禪と云ふものは、特別に餘裕を求めねば出来ないとか云ふ様な、ソナ不都合千萬なものではない。何人と雖も、常に爲しつゝある事、其れが直に坐禪である。若し廣義に云はゞ彼の大工左官でも百姓町人でも凡そ名人と稱せらるゝ者に至つては、最も此の方法を實行して居るのである。

唯彼等は明に自覺せざるのみである。近代でも西郷南洲と云ひ、勝海舟と云ひ、伊達自得と云ひ、山岡鐵舟と云ひ、皆此坐禪を爲したる人である。苟も世界に大事業を爲し、大功績を残せる者は、必ず此の理屈以外に超越したる坐禪を實行して居る。但し眞に參禪入室せんと欲するものは唯雲の如くに、ボンヤリした考を以て居ては駄目だ。十二分の工夫を凝らして、後始めて參禪入室の資格ある者と云ふべきだ。故に誠心誠意我が禪宗の端的即ち向上の一路を體得せんと欲する者は、始め先づ卑き身の坐禪より起ちて、後漸次に心の坐禪に入るの覺悟をして貰ひたい。

十 婦人と家庭

偕て今日は、當龍丘村全體の婦人會の總會と云ふ日がらに當るそう度、丁度私も此の間から來飯して一週間の法要を終り、昨日は河野村へ參りて一泊致し、今朝飯田へ歸りて曙座の下伊那聯合青年會に臨み其れ

を終りまして直に、御當所の名所なる天龍峽に參り、次で此の所へ駆けつけたる始末であります。折角天龍峽へ來たならば幸ひ今日は婦人會であるから何か一場の講話をせよとの事、實は此の間は女學校へ行き、昨日は河野村の婦人會に臨み、今日又御當村の婦人會に參るなど、誠に御婦人に縁が深いと見える。ソコデ今日も何か御婦人方に適切な御話をしたいと思ふが、其れを考へる時間の餘裕を持たなかつたから諸子に對して何か組織した御話をする事が出來ない、唯お目にかゝつて思ひ浮べるまゝを御話して見ようと思ふが、兼ねて話にも聞て居ました。長野縣は日本全國中唯一の教育の進歩した國と云ふ事を、成程斯うして見受ける所、今日は婦人方が多い爲めでもあろうが、滿堂甚だ靜肅にして居らるゝには、私も深く感ずる所であります。

婦人と云ふ事に關係した事を話そうと思ふが、昔は女を教ふる事は甚だ嚴格であつた。西洋の例を取り出すまでも無く、凡べて昔は女を下く

見た。今日の人より見れば可笑様なれども、其の時代の婦人には適して居たのちや。儒道も佛教も婦人に對する教は同じ事である。記憶のまゝを云へば、第一に女子と小人は養ひ難し、之を近づければ馴れ之を遠ざくれば怨むとある。女子は養ひ難きもの、女子を教育する事は甚だ困難なるものであると云ふ、婦人の欠點を擧げたのであるが、良薬口に苦しで、此れは決して婦人を悪く思ふて云ふたのでは無く、昔の聖人が親切に女性を教へられたのである。斯う云へば西洋崇拜にて東洋道徳を無視して居る輩は、必ず婦人とても世界の文明を生み出す大切な道具であるから、其れを輕視するのは甚だ婦人を侮辱したものだと言ふであらう。此中には、娘も嫁様も母も居らるゝであらうが、若し私が婦人ならば此の古語を聞て最も難有く感ずるのである。固より婦人の長所をのみ揚げて云ふのも善いが、然し其短所を示して云ふのは、其れを矯正せしめんとするので最も親切なる教育法である。佛教の經典には外面如菩薩内心

如夜叉とある。外面より見れば佛菩薩の如く見ゆれども、内心は夜叉の如しと、嚴しく云ふたのである。此れも亦親切なる語である。兎角婦人は虛榮心の盛なるもので、近頃立派なる教育を受けた女學生、或は其れより上りし夫人を見ると、殆んど見えの爲めに腐心して居る。例へば既に結婚せる婦人を見ると、唯立派なる夫に結婚したのでは無く、其外に奇怪なる目的を有して居る。即ち財産の有無ちや、女學生上りの婦人などは一般に、夫よりも財産の有無を考へて居る。故に言を換へて云へば、多くの婦人は其人と結婚するので無く、財産と結婚するので、此れ皆見えの爲めである。ヨシ財産を主眼とせぬまでも、或は勳爵を望み、或は好男子を擇ぶ、其内心を正して見れば、何れも皆見えの爲めである。一つの學校に入るさへ、跡見女學校に入るよりも、華族女學校の方が世間の「ミエ」がよいから、此の方に入ると云ふ様に、勉強も苦勞も悉く虛榮の爲めにして居る。だから其れを外面より見るとウツクシイ觀音が普賢

の様に見えるけれども、内心に立入りて見ると、ウラメシ、クヤシ、ネタマシと云ふ様な色々の穢れた心に満ちて、夜叉即ち鬼の如くに見えると云ふので、此れも亦聖人が婦人の心を立派にせんとする親切より出でた事である。又腹は借りものと云ふ事もある。婦人の腹は假りもので恰も器の様なもの云ふ事である。東洋は常に一夫一婦であるが、一人の女に子なければ他に妾を持つ事に成て居る。婦人は家督相続の子さへ産めば其れで責任を盡くしたのであるが、子を産まぬ婦人は責任を盡くさぬものであるから、其れは出しても差閭へ無いと云ふ考に本づくのである。故に子無きときは去ると云ふ語もあつて、殆んど婦人を機械の如くに心得て居た。

然るに明治の今日は、世界一般に女子教育が盛になつた結果、婦人の地位が高くなつた。太田錦城は夙に通俗的に、世の中に三つの資があると教へて、

一に、佛法、 二に、鐵砲、 三に、女房

と云ふて居る。第一の佛法とは推し廣めて云へば凡べての正しき教と云ふ事、換言すれば宗教と云ふ事である。第二の鐵砲とは語こそ古けれ、錦城の意では今日の軍事的設備と云ふ事である。第三に女房とは即ち一般の女子の事である。第二のものゝ必用なる事及其の効果は口で云ふよりも已に目に實驗したのは日清戦争や、北清事件や、日露戦争であるが、就中日露戦争は時間空間の上に於て、未曾有の大戦争であつた。日本は此恐るべき大戦を経て漸く軍備擴張の急を説くに至つたが、錦城は既に業に其以前に於て此事を明言して居た。日露の戦争に由つて、日本は立派なる戦勝を得たが、其結果の割前は、如何に配當すべきかと云ふに、一は武人で他は婦人であるが、私の見る所を以てすれば、寧ろ婦人に大なる力が有つたと思ふ。決して婦人に御世辭を云ふのでは無い。私は第一師團の従軍布教師として親しく戦地に渡つて戦争の實況を見たが、内

地では旅順が陥落したと云ふので、其の祝勝の爲め、人は狂氣の如くに喜び廻はつて居るのに、戦地に在つては幾多忠勇義烈の將卒を殺して、最も悲惨極まる時である。我々を代表して居る軍人が、一身を犠牲に供して居るのは、陛下の御稜威に本づくことは勿論であるが、更に男子を戦地に出したる家の婦人、即ち娘、女房、母たるものが、三度の食事を二度にしてまで、ドーか立派な功を立て國家に忠を盡くさしめようとて、裁縫するにも、洗濯するにも、常に此至心を以てした、其力に預て大なるものがあると思ふ。戦地に在つて最もよく軍人の心を慰藉するものは、立派な學者、宗教家の語に非ずして、誠心を込めたる僅なる一通の婦人手紙である。將卒が將に戦地に向て出發する時、途中にて萬歳々と云ふ聲を聞くときは、唯死んで呉れ、死んで呉れと云ふ様に聞えるとの事、殊に子供や娘や妻の聲に萬歳を唱へらるゝときは、我知らず精神が興奮して、一生懸命に國家の爲めに一身を捧げる氣になると云ふ。古來如何

なる英雄偉人と雖も、其裏面には必ず婦人の力の加はらざるものは無い、太田錦城は第二に鐵砲を置きたるは、凡べて表面的に一國の獨立を保つ上に軍備の必要を示したるので、第三に女房を置きたるは、其の裏面に婦人の力の加はれる事を説いたのである。故に吾人が一家の盜賊の用心をするには、戸じまりが必要なる如く、一國安寧の爲めには軍備が大切である。錦城が女房と云ひしは人の妻を指した如くであるが、實は婦人全體を指してをるのである。一國家を組織する人民も大に區別するときには女性にして、他は男性である。一家庭も亦其の通りである。男は外に當り、女は内に當る、殊に女が小供の教育に深き關係がある。子供は學校にさへ遣れば教育は出来るものと思ふが、決して然うで無い、小さい時は常に母親の膝下に居るものであるから、此間に存する婦人の責任は、中々に重大なるものである。教育と云ふ事を廣く云へば天然其物が既に一箇の質物教育である。花を見鳥を聞き、山川に遊び風土に接する此れ

皆教育ならざるは無い。人爲的教育の始めは胎内の教育で、其の次ぎが家庭となり學校となり社會となる。就中大切なるは胎内教育と家庭教育であつて、此れ無くして學校教育のみでは、到底完全なる教育を得らるゝものでない。一度び婦人が子供を胎内に宿すときは、既に其時より教育は始つて居る、見る聞く食ふ行ふ、凡べて胎内にデベロッパして居るのである。故に常に此心得が無くてはならぬ。既に胎兒が生れ出でし後は、親子の關係は切ても切られぬもので、母の一言一句は、白紙の如き子供の心の上に印象するのである。西洋人は一國の文明を計る寸尺になるのは女子教育にして、女子の品性の進める國家は文明國で、女子の品性の下劣なる國家は半開國だと云ふて居るが、太田錦城が女房を以て國家三寶の一に數へたのは、正に此意に外ならぬのである。

全體、宗教を如何に考へるかと云ふに、世の中の學問智識が進むに従つて、理屈が多くなるけれども、理屈ばかりでは一家を治める事は出来

ない。親が理屈を云へば子も亦理屈を云ふ。夫は夫の權利、妻は妻の權利と互に理屈を云ふて兩立するときは、家庭の治まらぬ事は明である。學校の教育のみでは家庭は圓滿には治まらない。然るに此間に在つて調和の力になるのが實に宗教である。宗教と云へば色々澤山の種類があるけれど、今云ふのは宗教心即ち同情心、即ちナサケ心と云ふ事で、儒者の所謂忠恕と同じのである。西洋人は「シンパシー」と云ふて居る、親には孝、明友には信と云ふが如きも皆同情である。此同情と利己心即ちセルフィッシュネスとは兩立しない、佛は世界を悉く我物にみそなはずから、其心には彼我の區別は無い。此れ佛の大同情、即ち大慈悲に本づくのである。若し婦人が此の同情を以てかゝれば、夫の邪癖でも、男の悪習慣でも皆矯正する事が出来る。今私が車で此所へ來る途中に、處々に報徳會なる文字が札に書いてあつたが、此文字の開山は二宮尊徳翁である。翁の感化力は今日に至るまで益々其光輝を放つて、何れの所でも皆此主

義を實行せんとして居るが、此れ皆翁の同情心に基づくのである。翁の同情心の起りは、幼少の頃『法華經』中の觀音普門品を誦したる所、其中に觀音様が或は天大將軍の爲めに、或は童男童女の爲めに、或は居士宰官の爲めに各々三十二の身を現じて説法せられたと云ふ事が書てある。此内に少しも利己の事が無い、皆他人の爲めに説法するので、決して其報酬が書いてない。二宮翁は深く此れに感じられたのである。我々は既に幼少の時より『觀音經』は記憶して居るけれども、一向其邊の事は無頓着なるにも拘はらず、翁は幼少の時既に此れに氣が附かれて、後日の二宮翁となられたのである。月は清き水にも、濁れる水にも、大海の水にも一椀の水にも影を宿すが如く、觀音は誰でも出て来る者に向て一々説法されたので、信用の事も經濟の事も、小作人を業にさせるのも此の心さへあれば、禍を轉じて福とする事が出来ると思ひ、二宮翁は此より誠實と實行とに依りて、今日の事業をあらしめたのである。何れの事業と雖も

同情心無くしては得らるゝものでない。然るに婦人の特色として先天的に美はしき同情心を備へてをる、之を助長し之を發達せしむるは、宗教并に教育の力にあると思ふ。今此地の如く婦人會を盛んにすると云ふ事は、實に其土地の名譽なるのみならず、延ては社會の幸福である。諸子は學問上の智識は已に學校に於て得られたのであるから、今後は大に婦道婦徳を進むる事に力を盡くしてもらいたい。

十一 感謝と報恩

私は始めて滿堂の諸君にお目にかゝりますが、先づ御話ししやうと思ふのは感謝と報恩と云ふ事である。報恩とは道德上の語では報徳とも云ふてある。宗教には色々澤山の種類があるがツヅメルと唯此報恩の心と感謝の心である、それを細に云へば甚だ廣大であるが、便利の爲め古人の歌を借りて示せば、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなきに涙こぼるゝ

と云ふ意に同じぢや。此の歌は西行法師が伊勢參宮の時に詠せられたるものである。忠とか義とか信とか云ふのは、皆此心の活動の方面に名けたるものに外ならぬが、此心の由て起る所には、所謂感謝と云ふものがある。其れは神と云ひ佛と云ふも宜しいが、何にかしら、我より大なる何物が活きたるもが在つて、我を助けて呉れと思ふとき、其れに對してムラ／＼として起る所の心である。諸君が親に對し師長に對し佛に對し神に對せるときは、皆此の心である。吾人が天職を果たす上に於て、今日一日を無罪健全に暮りたいと云ふのも、此心を持って働いて居るのぢや。此心あれば、例へ病氣しても感謝の念が起る。吾人の意志の力を大慈悲の神や佛が、試みて下さるのだと云ふ心が起る。此心あるが爲めに、一日々々を愉快に送る事が出来る。西行法師が伊勢の大廟に參られたとき、

何とも云へない、インスピレーションに打たれたるとき心の心を斯く詠せられたのである。此れは智識や理屈では判断が出来ない、感謝の心とは、仰で見えて我以上のものに對するときの状態を云ふのである。我から下に向つて云ふときには、同情の心即ちシンパシーとなる。妻が夫に夫が妻に對するときの愛の心も之に外ならぬ、唯難有と云ふのみならず、前途に望を持って、洋々として進むときの心、即ち感謝の心である。

此心を一步進めると、報恩或は報徳となる、受け難き人身を受け、逢ひ難き佛法に逢ひたりと感謝する。此れを宗教的、深き意味を以て見るときは、此身は誰から貰ひしか、此髮毛一筋も此薄皮一枚も悉く父母より受けたるもので、爪の垢一つも自分のものは無いと思ふときは、忽ち感謝せざるを得ない。少し位智識が出来ると、父母を父母とも思はぬ者があるが、善く考へて見ると、中々容易ならざる恩を受けて來たものである。故に佛は此れに對して、報恩せよと教へられた。此れは家庭に於け

る事であるが、國家に對するときは、佛は國王の恩を報せよと云はれた。日々我々が安穩に生活の出来るのは、皆國王の恩である。國王は世界に澤山あるが、實に吾日本の陛下の如きは稀である。如何に各國共に國王はありとも、一朝變あるときは國王却て臣下となり、臣下却て國王となる、君臣とは一時の約束上の事の如くである權利爭奪上の事である、嘗に夫れのみならず、國王も時には兇手の爲めに殺さるゝに至る、支那朝鮮さては歐米の或時代には、此忌むべき實例が澤山ある。然るに我々の上御一人は萬世一系の御位にまします。教育の御勅語にある如く、皇祖皇宗の御昔より、金匱無闕である。且つ我々は君臣の關係のみならず、親族の關係を辱ふしてをる。勅語の上には忠孝の二字と分れたれども其實は忠即孝で忠孝一致である。孝即忠。此れ日本國民として、感謝せざるを得ない、又衆生の恩即社會的徳徳の標準として、其恩を報せよと云はれた。國王の恩、父母の恩に報せよと云ふ事は、東洋徳徳の粹で

あると共に、我が佛敎の特色である。獨り社會の恩即ち人類同志他人同志の間に、何の報恩すべき事があるかと思はれる。けれども深く考へて見ると感謝禁せられぬ意味がある。即ち報恩せねばならぬ。我々の衣服、飲食、家屋は誰が作りしかと云ふに唯自分や親族のみが作りしもので無い。一枚の衣服と雖も、蠶を飼ひ糸に製し、機を織つて染めて縫ふて漸く肩にかけるまでには、幾千百人かの油をしぼり汗を流さして、苦辛焦慮の結果に出来たるものである。其外一枚の障子も一枚の壘も皆幾多の人の手を経て出来たのである。一粒の米と雖も、苗を植てより刈り取りて、煮て食するまでには、七十有餘回の手數を経るとの事である。苟も我々の使用する所のものは、悉く社會の人々が働いた結果で出来たるものである。佛は小豆大の眼を持てせず大に智慧の眼を開いて社會を見られた。有無相通じ長短相補ふと云ふのは經濟界の事實であるが、人間同志も亦其れと同じく、強者は弱者を、金持は貧乏人を、智者は愚者を助

ける、政事、經濟皆其通りである。又他の學問の方面より云ふも我々は食物に依て毎日働いて減じたる血や肉を償ひ充たし、其食物は腹に入つてカスとなり、出ても又肥料となつて、田や畑の藥となつて居る。又この庭前の草木の口(?)より吐き出す酸素は人間の爲めには食とも藥ともなる。その如く人間の吐き出す炭酸瓦斯は却て草木の藥とも食物ともなる。斯く有用のものが無用のものを、無用のものが有用のものを助けて、佛の目より見るときは、世の中には何一つも棄つべきものは無い。名醫は牛溲馬溺をも藥とする。社會は相互に持ちつ、持たれつせねばならぬ。故に人は心を屠く持ち失敗しても病氣しても、此れは自分を試みる爲めのものなりと考へて、日々是好日と云ふ心持ちで過すがよい。理屈は立派でも此を實行せねば駄目だ。何物を取らんと欲しても、先づ實行せねば取る事は出来ない。

言ふ事は易く行ふ事は難しで、實行は中々困難である。或山寺で三人

の僧が無言の行をしようと約束をした、我々は唯法螺を吹たり無益の話ばかりせずに、無言の行をするがよいと云ふので、愈々行を始めて佛の前に一時間もせぬ中に、燈明が消えて暗くなつたので、中の一人の僧が火が消えたと云ふと、又他の一人の僧が、「無言の行をして居るのだからだまれ」と云ふた。すると更に他の一人の僧が「折角無言の行をして居るのに、一時間も経ぬ中に約束を破るとはア一なさけ無い」と云ふて、長々と饒舌つた。かくて無言の行は三人とも破れた。此れ實行の容易ならざる事を示したものである。要するに我々宗教心を持つものは、自分以上に大なるものある事を思ふて、凡べてのものを迎へ、家庭には父母、國家には國王、社會には人類、宗教には神佛の恩を報せよと云ふ事である。「我ものと思へば輕し笠の雪」

十二 宗教と教育

今日私は、諸君の前で何を御話したらよいか、實は来て見ねばわからないので、まだ演題は定めてありませんが、今此の壇に登て斯うして見受ける所、第一には妙齡の御婦人が多數を占め、次には高等小學校へ入學したばかり位の御子供衆、其の次には大人として男子の方々が多い様である。即ち一堂の諸君は三つの段階に分ち得るものと思ふ。其の三段階の中に可憐なる子供、妙齡なる婦人、而して大人と夫れく耳に入る様に話す事は中々困難だから、三段階中妙齡の御婦人をして主として、其の耳に適切だろうと云ふ程度に於て御話を進めて見ようと思ふのである。

別に演題の求もありませんが、改めて掲げませんが、先づ「宗教と教育」即ち「レリジョンとエデュケーション」との間を往來して、御話する事にしませうが、其れに先立ちて第一子供に、一つの實地に効能のある事を云ふて置く。其は物を聞く事である、即ち諸先生の教授を受くる様な

場合には、虚心平氣でなければならぬ。若し何か善い事を聞き貴き教に接しようとするには、自分の心を清く洗濯せねばならぬ。此れだけでは簡單にして腑に落ちないと云ふならば、一つ經文にある例を話すから、家に歸て父母に話すがよい。人間は見方に依て色々に見られるが、先づ一つの器物即ち徳利に例へて見るか、經文に依ると器物を倒器、覆器、穢器の三方面より見てある。倒器とはコロガツて居る徳利を云ふので、徳利がコロガツて居ては酒も水も入れる事が出来ない如く、人間も不真面目なる者に對して、如何に真面目な事を話しても、聞き入れるものがない。覆器とは蓋のある入物と云ふ事で、イクラ物を入れようとしても、入物に蓋があつては入れる事の出来ない如く、子供でも先生や父兄が善い事を教へようとした所で、自分は聞きたくないと思ふと云ふて、目を閉ぢ耳を塞いで居ては、何ともする事がならない。次に穢器とは穢れたる入れ物と云ふ事で、穢れたる徳利には、如何なる奇麗な水を入れ、酒を入れ

ても、皆破れてしまふと云ふ事である。

此の三つの事が善い教を聞く時の必要條件で、一口に云へば、所謂虚心平氣と云ふ事である。我を空虚にして、教へる人の口となりて聞く事である。偕て此れから本題に入るのだが、宗教とは耶蘇教、ブラフマ教、ファイナイ教等澤山あつて、一朝一夕には云ひ盡くされない。又教育とも夫々専門があるから、一口には云へない。其又教育機關の學校でも、各々程度が異つて居る。幼稚園、小學、中學、大學等何れも皆入る者の根柢が異つて居る。されば私は此二方面に依つて、人文と公德、と云ふ事に就いて話して見ようと思ふ。西洋人の云ふ所を聞けば、凡そ地球上を旅行するときは、各國々の風景、地理、氣候などの異なる事は、容易に知られるが、其土地の文明の發達の程度を知るのは中々六ヶ敷い。ソコデ其觀察の仕方にも色々あるが、先づ一般の公德に就いて見れば、大概其土地の人文發達の程度を推測する事が出来ると云ふて居る。今私が斯

うして村々を歩いて見ても、其通り公德が如何に進んで居るかと云ふ事に依つて、其村の位置を知る事が出来る。公德とは先づ一般の人に對する心得方と思へばよい。換言すれば多人數に對する道徳と云ふ事である。自分一人のした事が自分一人に止まらず、延て他人にまで及ぼす事で、一家に就いて見れば、自分一人のした事が、近き父母、兄弟、奉公人に及ぼす事は勿論、更に大きくなると朋友、親戚、一村遂には國家全體にまで迷惑を及ぼすに至る。此場合に一人が公德を守らぬ爲めに、遂に全體が迷惑を感ずるので、此れは公德に不の字の加はりしときである。もし此廣い社會に對すると一家庭は一人の如きもの、即ち其中の行爲は私徳に止まる。例へば其子は兄弟仲善く、親には孝行すると云ふ事は、私徳を守る様であるが、豈圖らん其れが大なる學校とか、多人數の集りとか、遠國の旅行とかへ出ると、所謂旅の耻はカキつて却て不心得なる亂暴狼藉を取てする事がある。東京なれば上野公園とか日比谷公園とかに

散歩すると、其處には往々にして醉漢などが居て、他人に迷惑をかけて居るのを見受けるが、兎角下等社會の者は花見にでも行くときは、酒を飲で亂暴せねばならぬ様に心得て居る。公園は字の如く公の場所である、然るに人が見ないからとて、奇麗に咲て居る花の枝を折つたり、或は傍若無人に大聲を揚げたり、人に衝突したりするのは、實に公德を害するものである。其他動物園などへ行つて見ても、不注意なる者はイツデモ動物の邪魔になる様なことをして居る。或は寺社の柱や欄干に落書をするのは、皆無教育者に多い。落書は男も女もするが就中男に多い。又小人のみならず大人もする。兼ねて長野縣は日本國中一番に教育の進歩した所と聞て居たが、今日此の學校へ參つて見まして、更に落書などの痕跡無きを見て、成る程教育の進歩して居る事を知りました。東京の淺草の觀音様や、芝の増上寺などへ行て見ると、色々の落書をしてあるが、殊に乳から下の事が多く書いてある。印度や歐米地方にも、偶々落書を

見受けるが、人形の様なものは決して書いて無い。日本では共同便所などには、甚しく此種類の落書がある。支那風の道徳は忠臣烈婦と云ふ様な非常なるときこの事のみ上げて、日常平素の事は云ふて無い。然るに公德は日々の事である、細に云へば電車汽車に乗る時の心得も、此中に含まれてある。此れ等の交通機關を使用する所は、物質文明の進歩せる所である。試に此れに乗て見るのに、赤切符の人は比較的質朴なるに、却て青や白のそれを持って居る者に、公德を欠ける者が澤山ある。乗られる機械は二十世紀式でも、乗る人は矢張チョンマゲ流である、鞆をはやしたり、金縁眼鏡をかけて居る様な人が、第一に汽車に乗ると、荷物や辨當を自分の同行者の如くにカバツテをる。若し一個人より云へば、一家庭は一村落到對しては、一人の如きものである。更に大なる社會國家に就いて云へば、此日本の國家が他の國家に對するときは、一人たる位地に立つものは日本國家で、其他の國家は一家庭一社會の關係である。日

本人は支那人の或る者を見て、支那人は穢いと云ひ、英國人の少數者に對して英國人は泥棒だと云ふが、矢張り日本人が海外に行くとき通り少數の行動に付て、日本人は狡猾だと云はれて居る。故に旅の耻はかき捨てにならぬ。扱て日本人の外國にある者を見るのに、一般に公德を重んじて居らぬ。或は之を天眞爛熳と云ふかも知れぬが、實は小兒の頃より公德を教へられてない。學校に行くまでは、小兒は主として母姉の傍に養育されて居る。其の間に或は處かまはず小便をしたり、人の子と喧嘩をしたり、或は人の物を取つたりして、他人に迷惑をかけるものだが、此れ等の事は學校にあるよりも家庭に於て、殊に婦人の方々に注意をして貰ひたい。盗むとか取るとか云ふ事は、不徳の大なるものなれば、此れは人が互に注意するからせない事に成つて居るが、其の反對に、公德は割合に注意せられない。公德は一人がすれば、他人にも自然に及ぼすものである。此れは卑近なる例に就いて公德を話したのであるが、唯一

般の人のした事と、又特別な議員とか役人とか云ふ公職を有する人のした事とは、善惡共に其の及ぼす範圍を異にして居る。若し議員とか官吏とか云ふ者が、不徳、不義、破廉耻を取るときは、上の好む所下之より甚して、其及ぼす影響は、極めて大である。以上は宗教と教育と云ふ事を話す道行きとして演べたのである。

宗教を信する人が、公德を守るか守らざるかと云ふ事は、云はずして明かなる事で、無教育者無宗教者に比すれば、雲泥の相違がある。教育と宗教と云ふ事を一言に云へば、教育とは人間をして完全なるものにしてんとし、教へられつゝあるものである。然し教育に依つて物を知ると云ふ事は、目的では無くして手段である。此れには決して男女の區別は無い。換言すれば、教育は完全なる人を作る事、宗教とは人と人以上の者とを結び附ける事で、人以上の者とは天とか神とか佛とか極樂淨土とかパラダイスとか云ふ事である。故に宗教は現在の人は勿論、死でからの人を

支配するのであるから、宗教と教育との關係を知る人は、他人が見ても見なくても、逡巡が來ても來なくても、枝を折るの、小便するのと云ふ事はない。即ち咽喉もと通ふれば熱さを忘るゝと云ふ様な眼前の事に限らず、末の末まで注意して居る。赤十字社員となりし故に、婦人會員となりし故に、何か善き報酬でもあるかなどと云ふ様な事は考へない。然るに宗教的信仰の無きものは、何事に拘はらず、一々利益とか報酬とか云ふ結果に目をくれて居る。宗教的に云はば、右の手でした事は、左の手に知らずなとさへ云はれてある。此の種の金言は佛様の教訓中には澤山ある。以上は公德に就いての一端を示したのみであるが、此れに依つても宗教的信念のある人と無い人と、教育のある人と無い人とは自から異つて居る。此意味に於て、私の宗教は、禍福此れ祈ると云ふもので無い。一寸淺草の觀音様へ行て見て居ても、自分の心行を顧みないで色々の注文を並べて、觀音様を困らせて居る。宗教の眞意を知らぬ人は、宗

教とは此事だと合點して居るかも知れぬが、私の云ふ宗教は、決してソナナものでは無い。日本人は神參り佛參りと云へば、必ず神佛に向て色々の注文を並べるから、餘程辛棒強くないと、日本の神佛にはなられない。神佛に對して幸福利益、家内安全、息災延命死んでも命のあるやうになど願へば思ひ通り得られると思ふのは迷信と云ふものである。迷信は無教育者のみならず、立派に教育ある人が持て居る。昨年よりの經濟界の變動を見ると、社會に中々の位地ある紳士が株に手を出して棚から、牡丹餅的に萬一の僥倖を得んとして却つて失敗して居るが、此れ無教育者が迷信を宗教と思ふて居るのと同じ事ぢや。此の頃流行の競馬會も其始めは馬匹改良にあつたのが、今日では賭博同様の結果を來たして居る。斯くの如き現象は、一度び外國と日本と對立せる上より考へ來たる時は、捨て置き難き緊急問題である。日英同盟や日露協約の事のみ見て居るときは、日本も世界の最大強國となつた様な氣がするけれど

も、よく其の内幕を考へて見ると、日英同盟と云ふも、實は國際上相互利害打算の上の問題より生じた事で、同盟して置けば、何か利益があるであらうと思つて居るのである。如何に日本が英國と同盟したとて、政事、宗教、教育、人情、風俗までが同一と云ふ事は出来ない。今日の英國程の文明を致さうとするには、少くとも五十年百年の努力を要せねばならぬ。英國は世界文明の主なる所であるが、其の國民は決して一寸惚れしたり、一寸見て流行を追ふ様な事はしない。凡て深思熟慮の後に、其の可否を決定するので、所謂石橋を叩いて度るのぢや。然るに日本人は何事に依らず、猿柄巧で、一寸見て一寸惚れをする風があつて、流行の一時的の模倣は、中々に上手だが、其耐久の事に至ると、到底英國人などには残念ながら及ばぬ。ソナナ事では、日本の國家の前途が、杞憂に堪へられぬ、苟も日本人は日本人としての、氣象を養はねばならぬ、其れには日本固有の日本魂を養ふが宜しい。一も二も無く外國を崇拜し

て外國化せんとするが如きは、教育者の最も注意を要する所である。日本國民は、老若男女の區別無く、常に此心を有せねばならぬが、此信念を與へるに力あるものは、實に宗教である。宗教は人に大安心大決心を與へるものである。

要するに、耳に教へられた事を心に合點して身に行へと云ふ事であるが、話の枝に枝が出て、小供に話すべき筈の事が、却つて大人に云ふた様になつて、小供には甚だ氣の毒であつた。

十三 入室の資格

參禪に就いて人々室内に入り、自分の骨折りたる所見を、披瀝するのが、白隠門下の習はしである。然し自分が過去の實地經驗に徴して見ても、公案を得ると直ちに其れに就いて自己の所見の出来るもので無い。少くとも公案に対する、一箇の所見を作るには、坐禪三昧に入らねば駄

目だ。昨日も一寸御話し致した通り、坐禪には身の坐禪と心の坐禪との二つがある。然るに佛の坐禪を見ると、佛は先づ身の坐禪を最初に授けられた。其れは數息觀として出る息、入る息を正直に數へる事である。此數息觀は坐禪の最も初歩であるが、又最も終極である。智見を明にする上より云へば、人間には煩惱障所知障と云ふ二つの障りがあるから、此障りを除く爲めに其手段方法として、悟解とか公案とかを用ゐるのである。故に若し煩惱所知の二障を破り去る事が出来れば、最早や悟解も公案も共に無用の長物だ。例へば煩惱所知の障りは病の如く、悟解や公案は此に對する藥の様なものである。此藥を以て此病を治する事が出来れば、換言すれば悟解公案を手段として、凡べての迷を取り、洒々落々の境界に至れば、此れ即ち佛の境界である。迷も障りも無き者に、無暗矢麈に悟りをやらしたり、公案を授けるのは、恰も病無き者に藥を與へると同じく、藥毒の爲めに却つて其者を仆れしむるのである。毒も藥りと

なり、藥も毒となると云ふのは此事ぢや。だから此れが悟りだなぞと、一つの悟りを執して居るのは、實に悟りの病である。古人も佛見法見を取れ、と云ふ事を親切に注意されたが、兎角一知半解の徒は、此病に陥り易いから、十分に注意を加へねばならぬ。然し古則公案は手段だからと云ふて何も無く、暗證默照的に坐禪して居ては却つて又野狐禪に陥る。故に臨濟殊に白隠門下に有つては、公案を用ゐる事に最も注意をしたものである。然るに此習慣が長き時間を経るに従つて、遂に今日の或る輩の作す如き弊害を生ずるに至つたのである。

佛が最初に授けられたる數息觀は、何だか無意味の様な氣がするけれども、先づ十分間二十分間位づゝ之を試み漸次に進んで行くときは、遂には天地をも吞吐するの境界に至る事が出来る。公案を得て直に入室せんとするのは大膽無謀の舉と云ふものだ。元來人間が接制など云ふて凡べての雜念妄想を抑へんとするが、此は根本的に誤て居る。人間が肉の固

りに依て作られてある以上は、其れに依て惹き起さるゝ雑念妄想のあるのは寧ろ自然である。然るに其を強て抑制せんとするが如きは、木に縁て魚を求むるの類、千百萬年の後を期するとも出来るものではない。例へば影坊子を相手に喧嘩をする様なものである。だから雑念妄想を絶滅せしめんと思はゞ、先づ數息觀の三昧に入るがよい。此三昧に入れば、別に清めすとも心自から清くなり、別に静めすとも心自から静まり、洒々落落、以て別箇の新天地が開かれるのである。私も子供の頃より師匠や友人の爲めに教へられた事が、今日に至つて最も痛切に感じます。即ち眞箇の智見を開く爲めには、先づ身體の坐禪が大切である。今日世間の教育家が、智育が大切ならばなるだけ、其れだけ益々體育が必要だと説て居る。彼のハーバート大學の教授ゼームス氏の如き、コーペンハーゲンの大學の教授ラング氏の如き、主として此の主義を唱道して居る。彼等の説く所は一見甚だ幼稚なるが如く、且つ坐禪の方法も東洋人の所

謂坐禪とは其趣きを異にして居るけれども、其歸着點は同じ事である。即ち身を正うして不動の地位に置き、心的反射作用を制止する事、換言すれば有意的意志力を進めて行く事である。色來たれば目自然に之にみとれ、聲來たれば耳自然に之に誘はる、此れ皆心的反射作用である。此れ無意識的に作用して居るのであるが、今少しく詳しく云へば我が心が好き色を好んでをれば、好き色來たれば其が爲めに取り去られ、好き聲を好んでをれば、又其れが爲めに心を取り去られる。清淨無垢の青年が外界より來たる誘惑の爲めに引き去らるゝのも、此有意的意志力が弱い爲めである。即ち感情に制せらるゝのである。左れど此の薄弱なる感情も、之を一定の軌道に入れて正しく導き行くときは、立派なる慈悲博愛等の精神作用となる。感情以外に別に慈悲も博愛もない。だが感情を其まゝにして捨て置くときは、所謂煩惱妄想となつて、心の靈的光明を暗ますものとなる。然るに若し身を正うして考へる習慣を付けるときは、目に

色來たれば何の色かと考ひ、耳に聲來たれば何の聲かと考ひ、取るべきは取り捨つべきは捨て、是非善惡を商量する餘裕が出来る。此に至つて始めて心は外物の誘惑に左右されざるのである。佛の爲されたる方法は、皆此が爲めである。故に參禪入室せんとする者は、授けられたる公案に對し、十分に商量反覆を重ねて後するがよい。私は屢々此方法に依つて學生などに教へたが、一月すれば一月の効果一年やれば一年の靈驗を見る事が出来たから、今諸君に對しても亦此方法を御勧め致す次第である。

十四 獅子吼

今日は當地(信州飯田)各宗聯合會が主人となり、釋尊降誕會の心ばかりの式をせらるゝとの事であります。私も過日來諸方に於いて厄介になり、大分知り合が出来ました。今日も其方々より、丁度來合したから、出て一場の話をせよと云ふ希望に應じて参りました。まだ出してはありませ

ぬが、演題はと云へば先づ「獅子吼」と云ふ事にして置きます。

佛教の書籍を見た人は知らるゝ事でせうが、獅子吼とは唯ウーとか、ワーとか云ふ事に終るのでは無い。然らば獅子吼とは何ぞやと云ふに、佛の大説法を獅子の吼えるのに喩えたのである。獅子は猛獸で、野生のまゝのもの、人手に飼はれたものとあるが、犬ですら野生のまゝなれば狼の如く、人手にかゝれば従順となる通り、野生のまゝの獅子は暴く、人手に飼はれたものは従順である。此れを獸王と云ふ、一度び獅子が吼えるときは、凡べての動物の腦が破れるとさへある。此例を引きたるは、大聖釋迦牟尼如來が、宗教家にならぬ先き、即ち摩耶夫人の母胎を出づると第一に、吾々が呱呱の聲を揚げる如く、天上天下唯我獨尊と云はれた。佛法が日本に渡來したるは欽明天皇の十三年なれば、吾々の先祖は皆佛教信者なるが故に、吾人は遺傳的に此等の語を諳んして居る、私共も子供の頃に此語の眞似をした事がある。佛は甘茶の中で天にも地に

も、我一人と獅子吼せられたのである。

此八字だけで、釋尊の釋尊たる事は知られてあるが、今日は此れに私の考を附けて云ふて見よう。素より力めて其本意に近づくつもりではあるが然う云はれるだけしか云はれない。天上天下唯我獨尊とは、一言して置くが、此れを哲學的に話すのが正當かも知らぬが、今日は出来る限り宗教的に話す積りだけれども、ヤ、もすると學問的になり易いから、其邊は唯成り行きに任かして置く。我と云ふ考は、朝夕何を云ふにも必ず伴ふて居る。人間は凡べて天然自然何物を見るも、自己を本意として、一切のものを見る様に出て居る。昔ギリシヤの詭辨家が、人は萬物の尺度なりと云ふたが、此意味に於ては眞理である。一度び外に向はず、内に向つて自問自答すると、我とは何ぞやと云ふ事が中々知られない。丁度我が我を知らざる有様は、自分の眉毛を自分で見られぬと同じである。鼻の頭位は見れるが、中々眉毛は見られない。然し自分が自分に成

り切て後自分を顧みるときは、却つて自分が出て来る。昔から我を定義して常一主宰とある、我の義たるや、過現未を一貫して轉變せざるのちや、其を空間的に云へば、遠きも近きも、見ゆるも見えざるも常でなければならぬ。世の中の事は決して一樣では無い、現象界を見ると、顔を合せて居ても男と女、表と裏、善と惡、彼の我等の二つの相對で、三があれば六がある、四があれば八があると云ふ如く、凡べて夫婦的に出来て居る。一とは絶對と云ふ事にて對待するもの無き有様である。換言すれば無限無窮と云ふ事である。今所謂主宰とは絶對的權力即ち全智全能で一切の生殺與奪を自由にする力を有して居る。此れは大我の上に下せる定義である。私の帽子私の杖と云ふ我は假我、即ち四大五蘊の固りて、五尺か六尺に満たざる此身に外ならぬ。彼の酸素、水素、炭素、窒素等が固まつて元形が出来、其れより次第に物質が進化發展するのであるが、多くの場合には、假りの我を以て、自分の妻とか自分の財産とか云ふて

居る。然し常一主宰の我は、此れとは區別されてある。此が區別の理由は略すけれども、兎も角、常一主宰の我をば、普通に彼とか我とか云ふ我と對して、前者を真我又は大我即ちツルーセルフと云ひ、後者を假我と云ふ。佛が摩耶夫人の母胎をムヅと出るや否や、獅子の吼えるが如く、天にも地にも我一人と叫ばれたのは、此れ常一主宰の我を云はれたのである。佛教は義理が深いから、假名も澤山あるが、先づ我も眞理と云ふ事に見れば差闕ない。佛は生れ出づるや否や、何人も皆腹に持て居て云ひたき事を、人類、動物、植物等一切の總代となりて、天上天下唯我獨尊と云はれたのである。人間の先祖が猿であつたならば、其猿も鳥も、虫も細胞も天地我獨りと云ひたかつたのである。進化論者は人間の先祖は猿であつたと云ふが、其は既に後の事、最も先祖はウヂムシ其又先祖は微粒じや故に虱も蚤も將た東司のウヂムシも、天地我獨りかも知れない。人間は萬物の靈長だと云ふて、大なる面をして自惚れて居るが、若

し人間を客として、雪隠のウヂムシを主として云ふときは、必ずかく云ふかも知れない。此れ實に唯物論者と唯神論者とが、互に喧嘩の花を咲かする所であるが、要するに何れも唯従の一面を見たる議論にして、若し二面を透して見るならば、物を離れて精神無く、精神を離れて物は無い。今此柱が坊様に對して云ふときは、坊様や何かはウヂムシだと云ふかも知れない。イタリーの有名なるジョルダノ、ブルノーは汎神教を主張した爲めに、羅馬法皇に殺されたが、其は姑く昔の事で彼の汎神教は二十世紀の今日には、却て眞理と云はるゝに至つた。彼は子供の頃シカダ山に遊びし所、其山には谷がある、樹木がある鳥が鳴き花が咲いて實に立派に見えた。然るに此れに對するベスピアス山は噴火山にて、木一本も無き秃山なりし故に、ツマラヌ山だと思ふて下つた。然るに後日ベスピアス山に登て見たらば、前日とは異り、シカダ山に譲らざる好景色を有して居た。彼が汎神教は實に此に得る所あつたのである。禪宗の立場

より云へば、彼は此日に於て、大悟したのちや、主客所を異にして見れば、或は物となり或は心となる。身體を見るも、一方よりすれば、頭より足の爪先きに至るまで物となり、又他の一方より見れば心ともなる。手は手、足は足、目は目、尻は尻で各々天上天下唯我獨尊と云ふて居る。肉體すら天地我獨りと云ふが、人にして一身を成して居る此立場より見ると、天の日月星辰燦然たるのも、地の山河大地秩然として具はつてあるのも、禽が鳴く花が咲く、此れ皆唯我獨尊の有様である。人間界以外に神や佛がある如く思ふが、若し之ありと假定すれば、其中に寝たり起きたりして居る。此意味より見れば、皆天上天下唯我獨尊である。私が今日の拙稿に、

姫城春色興將深。活佛茲生即只今。

乞見雲花錦天地。頭々流露獨尊心。

と云ふたのは、實に此意に外ならぬのである。釋迦が獅子吼したるのみ

ならず、孔子も亦舜何人ぞ我何人ぞと獅子吼した。此れ決して瘦我慢では無い、常一主宰の我より云ふたのである。孔子自からは堯舜禹湯文武周公の意を繼ぐものなりと謙遜すれども、然かも尙ほ、かくの如くに獅子吼して居る。耶穌の如きもアブラハムの前に我ありと獅子吼して居る。シヨルグノブルノール曰く、「縦令如何に小なるものと雖も、神の心を宿さざる程小なるものは無し」と。換言すれば座敷中に浮で居る一塵の中と雖も既に神即ち佛性を宿して居ると云ふのである。經文を拜讀して居るときは、思はず成程と案を叩く事が澤山にある。此意味に於て、實業家は實業家として働きつゝ、光明ある所に近づく事を認められる。何れの所にも、目を見張て見るときには、真理の光りがある。合理的宗教も學問の根本意義も皆此れに基くのである。況んや佛が天地我獨りと云はれたのは最も難有い事である。三千年の今日尙ほ佛の光りに照されてあるのは、實に此意に外ならぬのである。

以上云ふた事は、哲學的學問的悟りの如くに見えるが、佛は之を直に社會的俗論門に應用せられた。佛が最初に教を説かれたのは、平民主義である。其平民主義とは四河海に注げば等しく、鹽を含む水となると云はれた譬の如く、天竺には四億に垂むとする人類があるが、佛の此旨を合點すれば、皆佛子である。印度には四姓の區別あつて西洋人は此を、カストと云ふて居る。四姓より引て更に百千の多き種族に分れた。士農工商の區別は、日本でも昔は中々嚴かつた。然るに今日では乞食の子でも、總理大臣たる事が出来る。印度では最も甚しく壓制的に四姓を區別した。或時代には羅馬法皇が、各國の國王に頭をサゲさせた如く、婆羅門は神と人との媒介者たるの位置を存して居た。即ち婆羅門は當時絕對の神權を代表して居た。日本の或、天子様は御自分の自由にならざるは、叡山の法師と加茂川の水と双六の賽だと云はれたが、然し今日では加茂川の水を逆流せしむる位はナンでも無い。パナマ、スエーヌの運河すら、之

を自由に開いたではないか。山法師は神の使者と稱して、何か事あれば直に日吉神社の御輿を擔ぎ出す故に、此に敵對するときは、陛下の御誓に背く。印度四姓の中セッターリは國王、ビシヤは農民、スードラは工商センダラは穢多とある。センダラは或人の説に依ると、捕虜か歸化人だらうと云ふが、印度にては殆んど人間としての價値を認めない。日本にても今日は土農工商の區別は取れたが尙ほ華族、士族、平民等の區別はある。故に此の時代の印度は、書物に依て見ると、十六種の國に分れて居た。其十六國中、更に小なる旗本小大名等の如き區別があつて。又其中で四姓を區別した。然るに日本にては臣民は、直に天子様の子なりとして居るから、戦争ありと雖も、必ず戦勝を得るのである。印度は其れに反して、かく迄も階級の區別があつたから、遂に今日の如き状態に陥つたのである。此精神上の壓制に對して、佛は自分の教を廣める爲めの叫び聲として、自由、平等、獨立の爲めには、四姓の區別無しと云

はれたので、佛が天地我獨りと云はれしのは、實に人の云はんと欲する所を代表して叫ばれたので、茲に始めて自由の天地が開かれたのである。アキレンサンダーが印度征服の後、無形の戦利品として、ギリシヤに持歸りし政治、文學、學問は皆當時此獨尊思想に依つて、作り出されたるものである。天上天下唯我獨尊の語の難有くして、且つ廣大無邊なる事は、大略かくの如くである。先づ今日は降誕會と云に際して、一言如上の事を申上げた次第である。

一五 健全なる思想の修養

本日は當校(信州飯田中學)の御求めに應じて、茲に一場の御話を致すこととなりました。而して私は前途有望にして、且つ春秋に富める滿堂の青年諸君に對して、御話致すのは甚だ光榮たるのみならず、又最も愉快とする所である。依つて實は始め如何様なることを、御話すれば適切で

あるかと考へましたが、兎も角一時間ばかりの間、「如何にして健全なる思想を養成すべきか」と云ふことを話して見ようと思ふ。

滿堂の諸君は、今正に萌え出でんとする苔の如きものであるから、諸方面から其智能を啓發しようとするので、或は科學の方面より、或は哲學の方面より、種々なる方面より力を盡して居る。故に限りなき豊富な學問の上より言へば、諸君はまだ初心の程度にある人々である。されば一方に此學問あるを知ると共に、一方にはこれに對する宗教と云ふものがあることを知らなくてはならぬ。而して宗教の定義は甚だ廣漠であるから、其定義の説明にも多くの時間を要するに依つて、今日は詳細なことは話す暇がない。大體宗教とは梵語に「アーガマ」と云ひ、其他ギリシヤ語では「レーレギョール」など、云ふ言葉があるが、其言葉の異なる如く、少々づつ異つて居る。然らば再び宗教とは何ぞやと考へて見ますと、仲々六箇敷い。今假りに諸君に對して、宗教とは何ぞやと問を發して見る、

已に學問を重んずれば、此れに對する宗教に就いて、如何なる考を持つて居らるか、問ふて見たいのである。元來宗教と云ふものは、餘りに深く且つ廣さがために、却つて宗教の如く見えて、實は宗教で無いものを宗教として信じて居る者が、天下に滔々として多數を占めて居る。諸君は今の學問の力に依つて、智能を諸方面から啓發するに従つて、思想が進歩發展して來る。然し其發展進歩し來る思想を綜合統一するもの無き時は、遂に大煩悶に陥るのである。智識と云ふものは、人間のためには、或時は長處ともなり、或時は又短處ともなるべきものである。故にかく智識の進歩の結果は、却つて疑を生じて來るものである。然るに若し此疑を解釋することの出來ぬ時は、茲に所謂大煩悶を生ずるのである。近時新聞雜誌の類を見るに、往々この煩悶病が、青年や學生を襲ふてをることが分る。世間的に申せば、廿世紀の學問は進歩しては居るものゝ、まだく旅行中に在るので、重荷を卸してヤレくと安心すべき時は、

到着して居らぬのである。即ち科學と云ふものは、研究すればする程、疑が生ずるのである。支那の古語に、「字を知るは憂患の初め」と云ふことがあるが、全く文字を知り智識が進むと、益々煩悶や疑問が生ずるのである。此のことは今日は略して置きませう。

然らば學問と宗教との關係は何うであるかと云ふに、學問は可知的世界のものであつて、宗教は不可知的世界のものだと云ふことが出来る。即ち科學は物に就いて理を明にするので、一の結果を見れば、其原因より原因に溯つて、最初根本の原因を認めんとして、愈々進んで止まぬものである。換言すれば、學問は智識を武器として、益々不可知界に向つて切り込んで行く、其不可知界を名づけて、プラトンは理想世界と云ひ、カントは實體世界と云ふた。學問と宗教との關係は、前者は人間の智識にて知り得る方面、後者は智識にては知り得ざる方面、即ち絶待界と云ふべきもので、相待差別の域を絶して居る。吾人の世界は皆相待して居

つて、天と云へば地が對して居る、善と云へば惡が離れぬ。父母と云へば子孫と云ふやうに、すべて夫婦的關係を有して居るのである。故に是非善惡共に、何れか其一を取れば、何が何だか少しも分らぬものとなる。故に凡べてのものが同一になれば、是非、善惡、内外、表裏、迷悟等の區別あることは出来ぬ。然るに世の中にはこの區別が存して居るのは、皆相待的夫婦的關係に基づいて居ることを證明し居る。故に人間の智識に依ると、或る程度までは知り得る、即ち海も山も月も日も、昔人には唯不思議なる壯大のものとのみ思考されたのであるから、此れを以て神として崇めて居つたのであるけれども、今日となつては古の神も、却つて我々人間の奴隸となるに至つたのである。

然し只今此一堂に居らるゝ諸君の中で、今の世の學問は學問の終極であると思はるゝ人があるならば、其人は未だ智識の狹隘なる者と云はねばならぬ。何となれば、堂中にチャンとして座して居る時は、如何にも

萬事を知り盡したやうな氣がするけれども、實際に一々の物に就いて見聞尋究し來る時は、追々分らぬ事のみが多くなる。幼稚園時代より小学校を経て、中學大學と進むに従つて、益々知らぬことばかりとなる。すべての哲學や科學者が、匙を投げてしまつたこと、即ち人間の智識では知られぬ事、學問の範圍外であると思つた事、此學問の終極點は宗教の出發點となるのである。學者の最後とする所は、宗教の最初とする所である。換言すれば不可知的と云ふことは、全く宗教の立場である。不可知と云へば、世間で醫者が病人を診察して、もう駄目だと匙を投げた如く、全く絶望の状態にあるかと云ふに、決してそうではない。寧ろ向上の一路とも云ふ、理想の至り盡くした積極的狀態を指したものである。故に若し此狀態を宗教に取り來つて宗教的に言へば、所謂真如とか菩提とか、無限とか絶待とか真我とか云ふものは、皆此事である。又或る經文に依ると、不可思議、無量壽、無碍光なども記されて居る。不可思

議とは人間の有限なる思想では、思議すべからざると云ふこと、即ち宇宙と我と同化した所を謂ふのである。彼のインスピレーションと云ふ語は、實に這裡の消息を洩したもので、此我を忘れ超然として、神と我、佛と我と同化した所を謂つたのである。我々の見聞する所のものは、凡べて碍のあるものばかりである。彼の聖徳太子は、八人の訴を同時に聞き分けられて、八耳の太子と稱せられた御方であつたけれども、之れは人間としての聰明で、彼の觀音大士の如く、圓融無碍の働は出来なかつた。之れは碍りがあるからで、太陽の光は如何に大であつても、尙ほ光線の及ばざる所がある如くである。然るに前に云ふた無碍光とは、心靈上の光を云ふのであるから、其光には決して時間空間の障碍は無い、此意味に於て無碍光と云ふのである。若し強いて之れを區別して見れば、無碍光とは空間上より云つたもので、無量壽佛とは時間上より云つたものである。無量壽佛とは又阿彌陀佛とも云つて、千年や萬年で終るもの

でなく、永劫無邊に實在することを意味して居る。去れば此の向上發展の、限りなき壽命に對して、無碍光と云ふも、無量壽と云ふも、不可思議と云ふも、其名の付けやうは人々の勝手である。唯其眞つた中に入つて、大安心を得ることが肝要である。大なり小なり、此大安心を與へ得ざるやうな宗教は、眞の宗教ではない、淫祠邪教である、迷信である。迷信とは此方より因由もなく祈りさへすれば、幸福も利益も健康も、また思ふことも成し得られるとして、無暗に其對象たる正體も分らぬ、或物を崇拜することである。

今私が諸君に對して、精神修養の一助としようとすることは、實に無限界の消息を得させようとするに外ならぬ。換言すれば轉迷開悟とか、無限界に同化するとか云ふことである。然し轉迷開悟と云ふても、他より悟と云ふものを持ち來して、新に取り込み入れ更へるとか、或はこの娑婆世界を打破して、他の理想世界を造るとか云ふのではない。轉する

と云ふも、開くと云ふも、手の表を見て居て、直ちに裏を轉するやうなものである。唯だ襖を開いて次の間にある物を、居ながら見るやうなものである。

田の草を取つてそのまゝこやし哉

古人は實に名句を吐いて居る。田の草を取つて其まゝこやし哉、生死即涅槃、煩惱即菩提で、欲しい、可愛い、憎いと云ふ煩惱を外へ追ひ退かなくては、悟の門が開けないと云ふのではない。即ち性慾でも本能でも、其儘根を切れればそれでよい、敵を降伏すれば味方で、盗人を捕へて見れば我が子なりと云ふの類である。若し此轉と開との味方を能く了知すれば、此不の字だらけの世間を脱して、天國に生れようとする必要はない。所謂娑婆即寂光淨土である。此迷の身體が即ち悟の塊である。然し佛教の中には、色々と専門の部分が異つてをるから、自力門、他力門と云ふやうな區別もある。自力とは自己の力に依つて安心を求めようとするもの

で、他力とは淨土教だの耶蘇教だの、或はプラフマ教等の如く、自分は小なる罪の塊であるから、神や佛の力に頼つて救はれねばならぬと云ふのである。他力的宗教は學問の上から見れば、其程度は下級に位して居るけれども、其れに依つて安心を得らるれば幸である。私の立場は自力的宗教にあるのであるけれども、決して他力的宗教を不可として排斥するものではない。然し學問の研究を進めると、阿彌陀佛とは何ぞや、神とは何ぞや、神は實在するものなりや、何が故に全智全能であるか、何が故に我々は神や佛と同等の力を有せざるか、など、云ふ疑問が續發して来る。去れば今の學問の方法では、他力的宗教は成立し難い。依つて彼の耶蘇教の如きは、何とか教理を改正して、學問的自力的にしようとして苦心して居る。けれども思ふ通りにすると、却つて耶蘇教の本領を失ふてしまふ。其儘でおくと日本の國體と衝突する。想ふに耶蘇教は歴史的に組織されて居て、佛教は因縁的に組織されてあるから、何れの處に行

つても當てはまる。されば今の學問の方法に依ると、神や佛の力に依り頼ると云ふ事は、少しく不都合である。扱て吾が禪は純自力である。禪では大に疑ひ大に考へよと教へ、淨土門や耶蘇教では考へるな疑ふなと教へる。即ち禪では大疑の下に大悟ありとして、大に疑ひ大に考へることとを奨励してをる。然し人間の有限なる能力では、如何に疑ふとも疑の最終は、宇宙の根本と同化するに至るのである。此れ即ち我、我を忘れて、我自ら我を超越したる事を意味するのである。此れを悟と云ふので、悟とは決して一種の神秘的の事を云ふのではない。法に従つて大安心を得る事を云ふのである。この法に依らなくば、如何に宇宙は何うの、人生は何うのと考へた所で到底根本を得ることは出来ない。彼の藤村某の如き、其心情には同情すべきであるけれども、其行爲は大に誤つて居る。斯様なる根柢にては、中々眞理は得られるものではないのである。

諸君、學問が進んで智識が増すに従つて、動もすると肺病や腦病やと

ステリーなど、吹けば飛ぶやうなものばかり出来る。若し吾人が救の聲を發するとせば、先づ此れ等の者に向つてせねばならぬ。其極自暴自棄となり果つる者。或は女學生者流の如きは、極めて單純なる個人本位の教育を受け、其結果自分自身の満足さへ得れば、社會も國家も家庭も父母も兄弟も、其喜憂は我れ關せず焉で、唯自分の好む所に依つて満足すればよいとして居る。米國の如きは最も此傾向の甚だしき所である。今や此現象は續々として現はれて來るから、教育家は勿論、吾々宗教家は、大に之れが救済の覺悟をせねばならぬ。况んや諸君の如き、無垢清淨なる人々は、豫め警戒して學問をすると共に、増大し來る妄想煩惱を安んせしむる工夫をせねばならぬ。學問以外のものは、悉く迷信であると云ふ人があるけれども、此れ等は未だ始めから眞に宗教の宗教たるを味はざる者の謂ふ事だ、吾が國體と宗教論者の如きは、亦この類である。若し果して宗教が彼等論者の云ふ如くであるならば、我々は最早や學問す

るには及ばない。人間の智識にて知り得たるだけが、眞理であるとせば、其は一笑の價もない。人間の意識に感情のある以上は、世間普通の宗教と雖も、尙ほ此れを取り除く事は出来ない。所謂後悔とか悲哀とか怨恨とか云ふ心を、人間の心より取り去る事の出来ざる限りは、宗教は無くなるものではない。即ち宗教では人の煩悶を無いと叫ぶよりは、既にある所の煩悶は、何に依つて救済し得らるゝかを考へる方が適切である。此れは智識や理屈を以て考へられる事でない。其處には無限と我神と人の一致すべき方法を講せねばならぬ。換言すれば慈悲の懷に入らざれば、吾人の煩悶ははらい得らるゝものでない。之れを家庭に取つて見ても知られる。若し家庭に宗教的趣味がなかつたならば、其家庭は實に乾燥無味であること、恰も蠟を嚼むが如くである。即ち宗教的家庭とは慈悲とか同情とか云ふことを中心として、互に親しく同棲するを云ふのである。此れと同じく社會に於ても、政治、法律、學問、理屈等のみに依

つて治めようとしても、中々容易に治まるものではない。社會には種々複雑なる現象がある。殊に彼の勞働問題の如きは、最も恐るべきものである。故に此れ等をも合せて治めようとするのは、必ず宗教の力に待たねばならぬ。正しき宗教は實に社會の血となり、また肉となる大切なものである。社會の秩序、國家の組織は此れが爲めに成立してをる。吾々が虚心平氣で考へるときは、吾々の心の奥には、常に靈なるものが目を開いて居る事が知れる。此れ實に宇宙人生の生命となる所の、宗教の根本である。故に人は此靈なるものゝ指導に依つて進まねばならぬ。以上長々と御話致した事は、學問と云ふことも、自分が一定の宗教的安立を得て、夫れと相待つて進んだならば、其學問は健全なる發達を遂げられるであらう。健全なる思想の養成には、宗教の力を待たねばならぬ。實に宗教なるものは、人生と云ふ機械を運轉するに必要な、油の如きものであると云ふ事を辨じたのである。

十六 日本魂と西洋魂

余は今日道俗有志諸君の招待によつて、之より一場の法話をなすに當り、何の題をとの注文により『日本魂と西洋魂』と出題した。諸君に初對面であれば如何なる話が諸君の根柢に適するやは計り難いのであるけれども、靜聽せる様子より察すれば、平生佛法の難有き教化のとどける事を知るに足るのである。余は今日は佛法中の難有い事より外に出で、世間的の例より御話致しませう。元より佛法と世法とは、一にして二あるのではなく、こゝに余は如何に世間的の例により、話をなすとしても、余の最終の願望は、諸君をして本師釋迦如來の教の中に於て、安心せられん事を祈るのである。然れども其道行として、本題を選んだのである。

扱何れより前に話すべきか、先づ西洋及日本といふこの定義を下す必要がある。西洋といへば、東洋、東洋といへば之に對して西洋といふべき

で、此熟語は近來の語であるか否かを研究して見るに、随分古く用ひられて Oriental 何々 occidental 何々といふ如く用ひられたり。西洋魂即ち Occidental Spirit 東洋魂即ち Oriental Spirit と稱す。同様に日本魂は Japanese Spirit といふて可い(？)。而して此 Orient と occident なる語は、往昔印度波斯地方に於て用ひられたる、玉商人の玉を賣買するに於て、西洋産の玉、東洋産の玉といふ語を用ひ、東洋産の寶玉は善良であつて、西洋産のものは劣つて居つた故に、西洋産といへば下劣を意味し、東洋産といへば善良を意味して居つたさうである。然らば地理上如何なる方面を指して、東洋といひ、西洋といふか、漠たる話にして其區域判然しない。左れと大抵は東洋と云ば、埃及、波斯以東紅海印度洋支那海を経て、日本を経て、大平洋の或地點までをいひ、其他を西洋或は歐米ともいふ。米といへば南北あつて廣いけれども、一般に北米合衆國を指して亞米利加と云ふが常である。以上は地理と國境の上の區別である。扱て東洋魂西洋魂とは、

抑も何ぞ、茲で序に一寸一言するが、魂なるものに就いては、古來誤れる解釋をなすものがある。所謂人玉といふ如き、幽靈的のものとして、人の死後は身軀の何れよりかぬけ出して、フワリ〜と天上に飛ぶ、或は地獄に墮つるなどの感をも有するものがある。かゝる誤解を有する時は、非常なる迷信を惹起して、或は死靈或は生靈のとりつくなど、迷信を生じ、ヒステリーを起し、或は病氣しながらも、醫師の診察を受けずして、一種の加持祈禱を事とし、(祈禱にも眞の祈禱あれども是は似て非なる祈禱)お神水お神穀など、稱して、危険なるものを服用する。若し其病が傳染病であつたならば、引いて、一村より一郡、一縣より一國と廣き社會にまで害毒を流すに至る、其大害實に恐る可きである。而も世には相當教育者にて間々かゝる誤解を抱けるものがある。況んや一般の愚民に於ておや。されば靈魂等について疑問ある時は宣敷智識ある人に尋ねて、其疑問を質さねばならぬ。

魂といへば、或は語弊がある。氣象若くは精神といふて可いでせう。即ち日本人的精神、西洋人の氣象、即ち西洋的精神といふて可からう。而して日本人の氣象即ち日本魂は、吾人が常に云ふ大和魂であつて、日本固有獨特のものである。此の日本魂こそ、眞に恐るべき精力を有するものであるから、日本人自身も、之を信じ、外國人も亦頗る之を畏敬して居るものである。然らば大和魂なるものは、果して如何なるものであるかと問へば、理屈にては明解し難きものである。或は瘦我慢を以て日本魂と誤解せるものもあるかも知れぬが、瘦我慢なるものは、其時期を過ぎ、或はより以上の力に遇へば、忽ち沮喪し、萎縮する。又チヨンマゲ主義と誤解する者もある、甚だ笑ふべし。日本魂は之と異なり、永久的確乎不變のものである。世間語にて之を智仁勇の魂といふて可からうか。然し余は今日以上佛教的意義を附加して語らうと思ふ。何となれば古來我國佛教は、日本魂の發達を助長し、日本魂は佛法の興隆を助け、

互に相關聯して其氣凝りては吉野の千朶萬朶の櫻花となり、秀ては東海唯一の芙蓉峰となつて、燦たる光輝を放つてをるからである。

扱日本魂解を解剖すれば、全く慈悲報恩の二に外ならぬ。日本魂の水に入ても溺れず、火に入ても焼けざる的の猛烈なる現はれば、即是れ此の蟲も殺さぬ慈悲報恩といふやさしき二つの心、否畢竟一つの心に外ならぬ。故に余は慈悲報恩の心をさして、日本魂の主要なる者と信するのである。慈悲とは何ぞ、經に曰く、「佛心とは大慈悲是也」と而して慈悲は佛のみ之を有するのであるか、決して然うでない。諸君も亦大慈大悲の心を有つてをる。且く吾等凡夫の心にあつては之を報恩といひ、佛菩薩より凡夫に對する時は慈悲の心と呼ぶのである。余は三十七八年戦役中自から従軍して、所謂屍山血河の慘憺たる戰場に於て、日本魂の實に慈悲報恩の赤心なるを深く實見したのである。當時此日本魂の解釋、即ち日本人が大事の前にあつては、身命を鴻毛よりも軽く捨つるは抑も何に

よるかに就いて大議論があつた。或者は曰く、義務の爲だと、或者は曰く名譽のためだと云ひ、某將軍と某學者の間の大論戦は、諸君も既に知らるゝ所であらう。然し我は其何れを以て其意を違して居るものと云ふ事は出來ない、尙義務、名譽以上更に重きもののあるを信するのである。慈悲の心即ち是れである。報恩の心即ち是れである。出征せる軍人を見よ、如何にして彼等は勇戦するか、第一に自己は彼等の犠牲なり、彼等は家の爲なり、父母の爲なり、君の爲なり、國の爲なり、正義の爲なり、即ち報恩の心なり、慈悲の心なりと自覺して、毫も法律的利害を顧みるの心が無いのである。古人は之を咏して

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

ア、如何によく咏したるよ、日本魂と山櫻、しかも朝日に匂ふ山櫻、日本魂を詠し得て誠に餘蘊なしである。此美なる精神の根底は、大慈大

悲の心である。換言すれば、報恩の心であると信するのである。予は米國に於て、大統領ルーズベルト氏に會つた時、彼は、「日本人は大事に於て我身を犠牲にして、少しも悔ふる事なき精神を有す、之れ其全勝を得たる所以である」と、謂はれ、賞賛して已まなかつた。此心こそ實に、心より心に傳へ、血より血に傳へ、所謂以心傳心的々相續して、以て大和魂の眞價を發揮し來れるのである。

然らば西洋魂とは如何、西洋魂といへば、其範圍頗る廣くあるけれども、米人自ら誇つて其、「Occidental Spirit」即ち西洋魂を最も善く代表せるものは吾が米人である」と謂つて居る。其進んで止まざる精神、剛健なる精神、潔白なる精神、所謂 American Spirit は實に良く之を代表して居ると謂つて可からう。然し日本の或者は動もすれば、アメリカ流、アメリカ主義と稱し、American Spirit を以て拜金主義とするものがある。是れまた大なる誤解である。蓋し其由つて來る所は悲しいかな、米國在住の邦人の大部

分は、勞働者であつて、金の爲めに行き、金の爲めに働けるもの、而も加州一帯の地に在住するもの、最も多く其數六萬乃至七萬に達して居る。而して此地は獨、愛、伊、西等の諸移民の集合にして彼等の多くは又、金の爲めにのみ働くの勞働者であれば、之を見、之を聞き直に米人を以て拜金主義と誤認するも、また無理ならざることである。彼等は金の前には仁義の頭を垂れ道德の腰を折る、けれども是れ眞のアメリカ魂ではない。眞の American Spirit は背越しの鏡を持たざる氣象である。

大統領ルーズベルト氏が地方を巡廻して加州に至れる時、加州大學のブレンデント、ホイラー博士、詩を作つて賞賛して曰く

Open as the light,

Strong as the north wind,

Viogant as the sun rise.

「光の如く公明正大にして、北風の如く強く朝日の如く生き〜せる精神。」

と、是れ American Spirit 中の眞の American Spirit である。スタンフォード大學總長シヨルダン博士も、亦之と同様の意を以て賞賛して居られる。ル氏は實に American Spirit の權化にして遺憾なく其精神を發揮して居る。ル氏は實に日本の恩人なると共に、又地球と人類の恩人である。日露大戦の結局を平和に復せしめたる仲介者は、實にル氏ではないか。試に見よ、當時吾々國民は、既に全力を盡したにも拘らず、露は此時に當つて正に蠻勇を續けんとした。此が調停の勞を取るものがなかつたならば果して如何、數十億の財寶を消失せるのみならず、實中の寶とも稱すべき幾十萬の人命を損し、愈々益々其慘禍の無限に増大なるや火を視るより明である。然るにル氏は之を救濟せられたのである。嗚呼ル氏は實に人道の爲め、社會の爲め、恩人といはねばならぬ。尙ほル氏を稱して、或米人が敏捷なる事は、事務家の模範なり、清廉潔白なる事は學者の模範なり、進取の氣象あるは、學生の好模範也、と謂つた。彼は清らかなる

事、酸素を含める空氣の如く、明なる事光線の如き精神を有して居る。空氣に見よ、空氣の不潔なるときは、多くの病原を生ずる。故に衛生上、空氣を清潔にせねばならぬ。吾人の心にして不潔であつたならば、罪惡は之より生じ来る。故に吾人は心を空氣の如く清潔にせねばならぬ。光線の及はざる所には、あらゆる病菌を有す、故に心中一の暗を有つてはならぬのである。扱て彼のル氏に對する讃詞と、我敷島の歌とを比較すれば、日本魂の精粹なるものと、亞米利加魂の精粹なるものとは、殆んど期せずして、暗合せるを見るのである。而るに何ぞや、吾同胞の利己主義者は米魂を以て金力萬能主義なりと速断せるは、大なる誤解ではないか。ル氏の富豪征伐を以て有名に、その不正不義者を少しも假借する事なきに見ても、其然らざるは明かであるではないか。

是故に予は日本魂と米國魂とは、其清廉剛健なる點に於て、全く一致せりと思ふ。諸君は、これを如何に想はるか。

十七 予が見たる花園國師

吾か畏敬する正法輪記者先生が遙に一書を寄せて云ふには明治四十二年四月は京都大本山妙心寺開祖關山國師の五百五十年であるから其紀念號に加へるため何でもよいから國師一代の諸餘に就いて其所感を書て呉れとの依頼である。されど我の如き樗櫟の性、朽木の質で、而も牴羊の眼を拭ひ、狐狸の智を逞ふして、どふして〜國師絶世の道德を品臨することが出来ようか、勿體至極もないことであると平身低頭して固辭したのである。時に傍にありて假寐せる管城子となん呼ぶ擔板漢あり、忽ち眼を開き意氣昂然として予を罵りて云ふ、咄個破瞎禿、汝は未だ佛祖傳來報恩底の一着子を知らぬのであるが、若し知らずは我落草して汝が爲に一言しやう。看よや韶陽は初生の墮雲に向て一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめんと云ひ、臨濟は黃蘗に一掌を與へて、風顛漢の稱を

得、覺鐵背は趙州柏樹子の話を無視し、杲屬天は圓悟の碧巖を燒棄して顧みなかつた。其古賢が報佛恩の實例は枚舉に遑ないではないか。汝若し卑屈にして先覺に倣ふ能はずば、我乞ふ試に汝に代て國師に一杓の惡水を潑くべし、是所謂棒下無生忍、臨機不讓師と云ふものである。

抑も江湖兄弟家が、吾か關山國師を崇拜するのは、何を目標とするのであらうか。其眞諦門に顯はれたる國師の面目か、或は俗諦門に現れたる國師の幻像か、其一生涯の前半截にあるか、將た後半截にあるのか。

或者は夢みらく、國師は人皇五十六代 清和天皇の御孫たりし六孫王經基の後裔、高梨美濃守源高家の御子なり、吾等一般平民と固より其系譜を異にす、豈貴からずやと。是國師崇拜家の最下なる者の考である。何となれば、若其系譜が貴しと云ふならば、國師以上高貴の門閥に生れたる古尊宿は一にして足らぬ、就中吾國の無文禪師、佛國國師、一休和尚等の如きは皆皇裔である。さては竺土香至國の王子たる菩提達磨、迦卑

羅衛城の太子たる黃面老子は國師の家系より更に幾等の上にあるではないか。其以下華胄清族より出たる者は數ふるに遑なしである。是故に我は敢て國師の名家に生れたるを、左程に難有とも思はぬ。或は又大本山妙心寺が、元花園法皇の離宮を轉して建立せられて、七堂伽藍、魏峨として雲笈に聳えてをる晨昏の魚鼓は琴々落々として山中に響いてをる。剩さへ其門派は臨濟宗の過半數を占めて、三千數百の寺院は星斗の北に拱するやうに、之に屬隸してをる。其大本山の關山國師は大に難有からずやと。併し乍ら壯塔の壯麗、末寺の衆多なるは、他に曹洞宗あり、眞宗ありて、遂に宗門の上ををる。假令眞言淨土の如きも、亦皆優に妙心一派を凌ひてをるではないか。是亦幼稚なる國師崇拜家の僻目であらう。然らば又或者は謂らく、國師は後醍醐天皇の依怙である、花園天皇の師傳である、加之後奈良天皇よりは本有圓成國師の諡號を贈り賜はり、後西院天皇よりは佛心覺照東山天皇よりは大完聖應、桃園天皇よりは光德

勝妙、光格天皇よりは自性天真、孝明天皇よりは放無量光の諡號を追々に賜はりたる間出の國師であるから、眞に崇拜すべきであると。然り、崇拜することは太だ善し、然れども古來帝師としての高僧碩德は、各宗派間其人に乏くない。況して天龍夢窓國師の如きは、七朝欽仰の帝師ではないか。我は敢て帝師としての關山國師に、左程重きを措くものではない。然らば關山國師の諸先哲に傑出したる特色は、何處にあるであらうか。乃ち其師大燈國師に代つて後醍醐帝の勅問に奉答して、不與萬法爲侶者什麼人と云はれたる(傳に見ゆ)所にあるか、兩彩一裘、或は補正成公に向つて公名如何曰正成曰是什麼と示された所にあるか自屎不覺臭、或は夢窓國師の上堂に當て、金翅鳥王當宇宙天龍如何廻避と問た所にあるか、錯、果然、點、或は藤瓊や、旅籠や、粉糞や、屋板の薪料や、茶樹の剷除や、種々の奇行の所にあるか、否々我の恐るゝは天下の賣僧輩が國師の皮相を學んで、只似而非的直情徑行を以て、禪者の行履なりと誤

認することである。然らば國師の所謂惠玄、這裡没生死の所にあるか。又云く柏樹子話有賊機の所にあるか。此兩段の示衆の如き猫頭鳩羽狐涎、狼肝直に是れ奪命の神符である。是れを如來五千四十餘卷の說法に勝り、祖師千七百則の公案を抜き、佛見も法見も爲に百雜碎せらるゝの概あり、されど是は吾門久參の上士でなくては分らぬ。然らば國師が無功用の境界、妙密の履踐底、即ち別言せば國師の國師たる所は何處にあるであらうか。看よ看よ國師が本地の風光、本來の面目は、濃北伊深山中聖胎長養の間に於て、遺憾なく發現せられたることを。且らく正法輪記者の口調を假りて云へば、「山路の紅葉の風に吹き散るを見ては、風幡の動くに非ざるを觀し、夜深の焚火に寒を凌きては、舍利を焼き取ると云へる故事を啜ひつゝ、往ともなく還ともなき、雲水の美濃の國なる伊深の奥には着き玉ひぬ。此間國師は一箇の客作の賤人として、張家の驢を逐ひ、李家の馬を驅つて、動中一味の活工夫を鍛鍊せられた。此時眼中に真な

く俗なく、佛天なく外魔なく、天子なく平民なく、本山なく末寺なく、關山なく惠玄なく、生死なく賊機なしである。唯是あるものは大悲の涙である。大願の血である。上求菩提の骨である。下化衆生の髓である。只此國師最尊勝の高踞ありてこそ、日本佛教の弊習たる貴族崇拜の積風を喝破して、勞働神聖の健氣を呼び起すに足ると云ふものである。是故に我は大本山妙心寺の開山として、國師よりも、寧ろ伊深山中の牧牛者としての國師を、深く崇拝するものゝ一人である。叱個畜生と叫んで、管城子は便ち出て去つた。

一字不説畢

明治三十九年桑港の春を迎ふ。三月三日、上野領本詩を以て不日子が東行せんとするを送らる。曰く

留錫具施一雨慈、小根如我隨分滋、
金門浦上春尚淺、早已大雲過落崎、
乃ち其韵に和す

熱喝噴拳亦大慈、恰如經雪古梅奇、
一蘆度水三千里、欲做祖師接上知、

(宗演老師の「臥米露水記」)

佛教書肆光融館藏版目錄

- 文學博士上田萬年君序 文學博士芳賀矢一君序文 織田得能師著
法華經講義 和神快入 全八卷 郵税三十四五十六錢
- 本講義は織田師が雄快痛切の辨を以て深玄微妙の奥義を發揮せられたる者也
 高津柏樹新編密校訂 松崎覺本師參訂編輯
天竺經碧嚴錄講義 和神快入 全三册 郵税三十六錢
- 承福大師以後の碩學天桂禪師が殺佛殺祖の巨眼を以て提唱せられたる珍書也
圓覺經講義 大内青巒居士講述 郵税六十五錢
- 此經典は唯心緣起の系統に屬するを以て密嚴、法華唯心緣起を缺する宗派の間に喜んで用ゐらるゝものなり
觀音經講義 大道長安師講述 郵税七十五錢
- 妙法蓮華經普門品の一品を世に觀音經といふ觀世音菩薩の大慈より種々の靈驗を顯して衆生を救濟するこゝを説けり
臨濟錄講義 勝峯大徹禪師講述 郵税八十五錢
- 眞門濟臨宗の開祖慧照禪師が一世の同其弟子に對して不立文字の眞法を體驗訓諭せられし法冊錄なるもの即ちこれなり
無門關講義 釋宗演禪師講述 郵税七十五錢
- 唐の玄宗皇帝の即位の年節を祝して慧照禪師が四十八則を掲し無門の關を開いて眞客を眞林中に導きしものなり
金剛經講義 釋宗演禪師講述 郵税四十錢
- 本經は佛祖の心法人類の性源を説顯したるを師が釋學的に說明せられたるもの

●梵文金剛經講義 文學博士南條文雄師講述 定價九十錢

●正法眼藏辨道話講義 高田道見師講述 定價五十錢

●瀉山警策講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●禪關策進講義 若生形山師講述 定價六十五錢

●佛遺教經講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●學道用心集講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●證道歌講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●普勸金剛講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●金剛心經講義 山田孝道師講述 定價四十錢

●信心銘講義 山田孝道師講述 定價二十錢

●般若心經講義 大内青樹居士講述 定價二十錢

●佛說法滅盡經講義 大内青樹居士講述 定價二十錢

●碧巖錄十則講義 大内青樹居士講述 定價四十錢

●寶鏡三昧講義 釋宗演禪師講述 定價四十錢

●原人論講義 大内青樹居士講述 定價四十錢

●維摩經講義 島地默雷師講述 定價五十錢

●四十二章經講義 大内青樹居士講述 定價二十五錢

●大乘起信論義記講義 織田待能師講述 定價十一圓廿錢

●寒山詩講義 若生國榮師講述 定價六十錢

●菜根譚講義 山田孝道師講述 定價十二圓
菜根譚は明の高士洪自暉が儒道釋三教の精を閉き世間人情の幾を穿ち醫性悟道の要訣を示せるものにして古今絶妙の快文章なり

●天台西谷名目講義 文學博士前田慧雲師講述 定價四十圓
本書は天台宗の術語を集めしもの天台宗を究めんと欲するものに最用有益の書

●天台四教儀講義 織田得能師講述 定價五十圓
天台大師法華經を著るに當り其卓越せる識見を以て佛一代教を融攝別圓の四教に判じて圓教の微妙を顯せし典範也

●十不二門論講義 島地大等師講述 定價六十五圓
書々十界五具すは差別の方面去れど又別に一切衆生悉有佛性の平等の方面あり而して差別平等不二と論ずるは此論なり

●那先比丘經提要講義 文學博士前田慧雲師講述 定價四十五圓
メナンデラ大王が北方佛敎國の後才那先比丘を宮中に請して佛敎の要義を問答せられたるものにして教理文學の兩面に於て貴重せらるる經典なり

●十善業道經講義 釋雲照律師講述 定價七十五圓
釋因善果惡因惡果は佛敎に於ける根本義なりされば十善業の因には如何なる果報を得るやを説ける初學入門の者に於て要なる經典也

●即身成佛義講義 釋慶淳師講述 定價五十五圓
草木國土悉皆成佛の旨を説くは眞言密教なりとす故に此身即ち光明を放つ佛なりと説けるは即ち此身佛なりとす

●淨土往生論講義 道重信教師講述 定價四十圓
法然上人の指南によりて淨土念佛門に缺くべからざる要典となりし淨土論は無量壽經の縮寫とも見るべき要典なり

●金獅子章講義 龜谷天守師講述 定價二十五圓
釋嚴宗の鼻祖賢首大師が支那則天皇后の請に應じ宮中に安置せられし金獅子を譬喩として華嚴の十支縁起を講せしものなり

●華嚴學講義 藤谷遠由師講述 定價二十五圓
華嚴經は八十卷あり釋尊成道後最初の説法なり本書は其要義を述べられたるもの

●菩提心論講義 姫宮大圓師講述 定價十六圓
八宗の祖師と稱めらるる龍樹菩薩の菩提心論を平明に釋く者也大乘止觀は天台宗の觀心の要諦を師が平易に講述せし者也

●大乘止觀頌講義 釋清源師講述 定價十六圓

●因明學大意 文學博士村上專精師講述 定價三十八圓
因明學は五明學の一で論理術を研究するに最便なり

●因明三十三過本作法講義 池原雅壽師講述 定價四圓
三十三過本作法は論理的に善意志を成立するに過三十三を棄棄する法を講ずるもの

●俱舍宗大意 齋藤唯信師講述 定價六十圓
俱舍論三十卷あり印度哲學の一で佛敎に必要の書を簡明に釋く初學者必讀の書

●十唯識論講義 齋藤唯信師講述 定價六十圓
三十唯識論方法唯心の攝は佛敎大乘家の主眼する所其要領を平易に説明せり

●正信偈講義 文學博士 前田慈雲師講述 郵定 稅價 四十七 錢

●阿彌陀經講義 吉谷覺壽師講述 郵定 稅價 四十四 錢

●觀無量壽經講義 島地默雷師講述 郵定 稅價 六十六 錢

●無量壽經講義 齋藤唯信師講述 郵定 稅價 七十五 錢

●梵文阿彌陀經講義 文學博士 南條文雄師講述 郵定 稅價 四十八 錢

●改悔文講話 伊藤哲英師講述 郵定 稅價 二十五 錢

●歎異鈔講義 文學士 近角常觀師講述 郵定 稅價 六十五 錢

●父母恩重經講話 若生國榮師講述 郵定 稅價 二十 錢

●佛敎概論 文學博士 村上專精師著 郵定 稅價 八十七 錢

●佛敎大意 織田得能師講述 郵定 稅價 四十五 錢

●八宗綱要講義 織田得能師講述 郵定 稅價 十壹 錢

●大乘佛說論批判 文學博士 村上專精師著 郵定 稅價 八十五 錢

●三經之大綱 齋藤唯信師著 郵定 稅價 廿五 錢

●七祖の大綱 齋藤唯信師著 前編定價 二十五 錢 後編定價 二十 錢 郵稅 四 錢

●佛敎倫理の大觀 齋藤唯信師著 郵定 稅價 十二 錢

●七十五法名目講義 織田得能師講述 郵定 稅價 六十六 錢

●父母恩重經講話 若生國榮師講述 郵定 稅價 二十 錢

●佛敎概論 文學博士 村上專精師著 郵定 稅價 八十七 錢

●佛敎大意 織田得能師講述 郵定 稅價 四十五 錢

●八宗綱要講義 織田得能師講述 郵定 稅價 十壹 錢

●大乘佛說論批判 文學博士 村上專精師著 郵定 稅價 八十五 錢

●三經之大綱 齋藤唯信師著 郵定 稅價 廿五 錢

●七祖の大綱 齋藤唯信師著 前編定價 二十五 錢 後編定價 二十 錢 郵稅 四 錢

●佛敎倫理の大觀 齋藤唯信師著 郵定 稅價 十二 錢

●**教育と宗教との關係** 文學博士 元良勇次郎君著
 定價郵稅共十五錢

●**日本教育の本義** 釋 雲照律師著
 定價郵稅四十五錢

●**日本哲學要論** 文學士 有馬祐政君著
 定價郵稅八十七錢

●**佛教哲學新論** 紹慶密應著
 定價郵稅十二錢

●**佛教金言集** 織田得能師著
 定價郵稅四十五錢

●**佛語解** 釋 織田得能師著
 定價郵稅一圓五十錢

●**佛家人名辭書** 鷲尾順敬先生著
 定價郵稅九錢

●**大乘起信論義記** 編 織田得能師著
 定價郵稅三十錢

●**和漢高僧傳** 織田得能師編纂
 定價郵稅六十錢

●**曹洞在家日課要集** 松崎覺本師編輯
 定價郵稅二十錢

●**寢惚の眼覺** 白隱禪師著
 定價郵稅二六錢

●**森田悟由禪師法話集** 若生國榮師共編
 定價郵稅二十錢

●**佛教のすゝめ** 山田孝道師著
 定價郵稅六十五錢

●**修證坐說教大全** 曹洞宗務局編
 定價郵稅八十八錢

●**靜坐のすゝめ** 釋宗演禪師著 櫻橋實嶽師評釋
 定價郵稅四十二錢

●**活禪** 若生國榮師著
 定價郵稅不廿五錢

●**自活** 山田孝道師著
 定價郵稅不二十五錢

●修養 話 後藤北溟師著
本書は古今大禪定家の參禪求道の要訣言行逸話等を網羅し趣味津津

●刀直入 若生園榮師著
本書は參禪修養の法と單刀直入的に懇々説きたる禪學書なり

●茶禪 田中仙樵著
本書は茶道と禪道と相よる所を師の健筆もて脱き盡されたる書なり

●味の禪 旨 原僧運禪師著
本書は老師の悟道の活眼より精微の熱誠を凝き禪學を指示講話せられたるものなり

●一休和尚全集 森大狂居士參訂
一休禪師の隨筆、小説物語、談曲、佛經講義、偈頌、和歌、盡く網羅す

●白隱和尚全集 禪學編輯局參訂
白隱禪師一生八十年間秘傳堅固兒孫の爲に盡せる者のかな文法語集なり

●禪林叢書第壹編 森大狂居士參訂
此書は東坡禪叢書、澤庵和尚叢書、正眼圖師眼目と收む珍書也

●禪林叢書第貳編 森大狂居士參訂
此書は承陽大師(遠元)法燈圖師等の和歌法語居士分燈錄を收む

●海舟言行錄 揖東正彦先生編
本書は近世の偉人海舟先生の逸事漫言等を網羅し是れ精神修養人格鍛練の師友たり

●鐵舟言行錄 海舟居士評論、泥舟居士校閱
本書は近世稀有の英傑たる鐵舟先生の十五歳より晩年に至る言行記録を録りたるもの也

●武士道 安部正人先生編
山岡鐵舟居士口述 勝海舟翁評論
日本武士道につき鐵舟居士の講話せられたるを海舟居士の評を註せられしもの

●禪士道 釋悟庵師著
實の妙味と武士道の精華につきその關係を述べたる趣味ある修身書なり

●禪長壽法 勝峰大徹禪師述
本書は精神的衛生を提へ古今の生法神傳秘法を詳述しさては養生求道の師友とす

●禪學早わかり 原僧運禪師著
禪なる禪を容易に解せしめん爲め諒々々々指示せらるる是れ參禪の捷徑たり

●偉人參禪錄 足立栗園居士著
●佛教人生論 高田道見師著
佛教の人生觀につき最詳細に論述せられ高評ある著書なり

郵定價 廿五 錢

郵定價 二十五 錢

郵定價 二十五 錢

郵定價 廿五 錢

郵定價 六十五 錢

郵定價 六十五 錢

郵定價 三十五 錢

郵定價 八十 錢

郵定價 六十五 錢

郵定價 六十五 錢

郵定價 四十 錢

郵定價 五十 錢

郵定價 四十五 錢

郵定價 六十 錢

郵定價 八十 錢

郵定價 十二 錢